

雲高く風絶えて花の嵐山 樽良
櫻三日四日を花や嵐山 完山

嵐山は山城國葛野郡松尾村にあり、全山樹木鬱蒼として山容温乎たり、春花秋葉ともに絶勝の名あり、櫻花は古來より有名なるが、龜山上皇吉野より移植し玉ひしものなりとぞ、山下一帯の清流は大堰川と稱し、渡月橋之に架し、橋の上流三丁許に千鳥か淵あり、大悲閣温泉場などの勝地此の附近に多し

夏霞 鋸山の齒のこぼれ 紅緑

鋸山は安房國にあり、其腰部より上は分れて日輪山月輪山等の數峰となり、宛も鋸齒を列ねたるが如し、故に此名あり

麻刈りて鳥海山に雲もなし 子規

鳥海山は羽後國飽海郡の東北に聳ゆる高嶽にて直立凡そ八千尺、山

巔に國幣中社あり

比良三上雪さしわたせ鷺の橋 芭蕉

初雪や四五里隔て、比良ヶ嶽 去來

暮遅し致賀の津まで比良の雪 素堂

比良の雪大津の柳霞みけり 几董

初雁や比良て追つく帆かけ舟 木節

比良ヶ嶽は近江國滋賀郡にあり、國中第一の高峰にて直立四千尺餘、比良の暮雪は近江八景の一たり

菜の花や摩耶を下れば日の暮るゝ 燕村

涅槃會や摩耶か高根は薄曇 士朗

摩耶は攝州武庫郡にあり、六甲山脉の峻嶺にして其頂に寺あり、阪路頗る峻嶮にして半腹に摩耶の古城趾あり

香具山に白き鳥飛ふ若葉哉 格 堂
香具山は大和國磯城郡の南部にあり、その麓には持統天皇御即位の宮址たる神社あり

蒲團着て寝たる姿や東山 嵐 雪
明易き夜をかくしてや東山 蕪 村
松風の掛乞吹くや東山 閑 更
春の日や暮ても見ゆる東山 一 茶
朧夜や南下りに東山 几 董
永き日や談義崩れて東山 雪 萬
衣更へて愚庵を訪はん東山 子 規

東山は京都市の東に位する諸山の總稱にして、北は如意ヶ嶽に起り、南は稻荷山に至る、之を東山三十六峰と云ふ、山勢温容にして毫も

峻刻の状なく、春は櫻花、夏は新緑、秋は紅楓、冬は銀雪を觀賞すべく、四時の眺めに佳ならざるなし

西山や日の上をゆく雁のすぢ 也 有
西山や扇落しに行く月夜 一 茶
西山や花の朧に日の落る 土 巧

西山は前記東山に對し京都の西方にある連山の稱にして、名所舊迹の多き故て東山に譲らずと雖も、市を距ること稍々遠きにより、行樂の便を缺きしも、近來汽車の開通せしより、西山の北端なる嵐山の如きは、四時遊客の蝟集するに至れり

奈良坂や夜も人絶えすお水取 一 琅
奈良坂は大和國より山城に出でんとする途中の坂にて時鳥の名所なり

薯蕷も蔚りて嬉しうつの山 許六
五月雨や晝寝の夢にうつの山 召波
蔦分けてかへ駕來たりうつの山 大江丸
筍や思ひもかけずうつの山 太祇

宇津の山は遠州志太郡岡部町より十石坂を歴て往くところの坂路なり、蔦の細道と云ふは此の山中にあり、伊勢物語に出でしより其名高く、古歌少からず、元來間道なるがゆる、深谿幽谷多く、石橋あり、奇岩あり、荆棘の間に奇勝多し

行秋や名古屋に浪のあかばかり 道彦

名古屋は一に勿來と書す、磐城國窪田村にありて常陸國關本村に跨り、其山上に古碑あり、源義家が和歌を詠せし古迹として名あり、上古素盞鳴尊東征し玉ふとき、此山に登りなこそ(勿來)の關と稱し

給ひしより其名起れり、往時は櫻樹多く、其後時の領主たる内藤侯更に植ゑ足し、も、今は幾んど一樹だも存せず

手向山の紅葉に鹿を愛す哉 碧梧桐

手向山春日へ出つる木下闇 青々

手向山は奈良市の東北にあり、其山麓に手向神社あり

稻妻や石を切る火の御影山 旨原

御影山は攝州武庫郡御影村にあり

秋霜の置き渡りしな朝日山 麥水

朝日山は山城國興正寺の後方にあり、山高からずと雖も秀靈の趣あり、宇治川の碧流其麓をめぐる、此山を遠く眺めば丹霞早く朝暎を迎ふるによりて此名ありと云ふ

うへ見えぬ笠置の森や閑子鳥 燕村

笠置は一に鹿鷲とも書す、山城國木津川の南に聳ゆ、元弘の亂後醍醐天皇此山に行宮を置き給ひしより著名の山となり、山中到る處古迹勝地多し、其昔し天武帝嘗て此山に御獵ありし時、大なる鹿跳り出て、帝に迫りしかば、帝は天に向て專念に御祈りありし爲、御乗馬一躍して危難を免かれ玉へり、帝は其の功德に酬ふるため、此山に伽藍を起し玉はんとて、其みしるしに、笠を置かせられしに因り此名ありと云ふ

小鹽山今日越え來れば神の留主

青々

秋深くなりぬ大原小鹽山

漫々

小鹽山は京都府乙訓郡大原村に屬す、山中に寺院あり

姨捨はあれに候と案山子哉

一茶

姨捨山は信州更級村にあり、觀月の勝地として名あり、昔し更科に

住める男、年若き時親を失ひければ、姨を母の如くにかしづき暮しけるを、妻心曲りし者にて、姨を深き山に捨よと迫りければ、月明るき夜、姨を負ひ往きて此山に捨たりしも、月いと照り澄めるを觀て、終夜寝ること能はず、復た再び迎ひ取りたりとの傳説あり

初午や人に隠る、稻荷山

閑更

稻荷山は京都市の東南伏見街道の東側にあり、絶頂を三ヶ峰と云ひ、山麓に稻荷祠を鎮す、賽者最も多し

日枝にこそ額の皺は朝霞

言水

霞みけり日枝は近江の山ならず

同

涼しさの日枝を上るや夏の月

召波

鶯の比叡を後ろに高音哉

蕪村

比叡に通ふ麓の家の砧哉

几董

大日枝や麓を横に時鳥 樗良
 大日枝や小日枝の下に梅の花 蒼虬
 日枝一ツ前に置たる雪見哉 乙州
 大日枝や運ふ野菜の露しげし 野童
 子雲雀の比叡山風立兼る 鳴雪
 浴外の根深畑や比叡風 格堂
 比叡山は往古日枝又比江とも書せり、京都郊外の東北に聳え、一面は琵琶湖に臨み、別名を都富士、天台山、我立山、鷲ヶ峰と云ひ、又大日枝小日枝の稱あり、往昔桓武帝遷都の時、傳教大師に勅して山嶺に伽藍を創設し、以て帝都の鎮護とす、延暦寺是なり、山中名勝舊跡多し

あしたには陽炎立ちぬ鳥部山 大江丸

鳥邊野や見越入道高燈籠 旨原
 鳥部山(鳥邊野)は京都清水寺を西南に下り、西大谷に至る路傍一帯を總稱す、墳墓累々として古來より諸宗の埋葬地たり、路傍右側の一寺内に阿俊傳兵術の墓あり

夏待や糺の森のよし簾 白明
 天の川糺の納涼過にけり 士朗
 川蓼や糺の茶屋の一夜鮮 紫曉
 糺の森は下鴨神社の鎮座ます處にして、加茂と高野の二川相會する處にありて河中に斗出す、老樹巨木鬱蒼として晝尙暗き趣あり、嘗て時鳥の名所たりしと云ふ

大峯や吉野の奥の花の果 曾良
 大峰や櫻の庭の雉の聲 李由

大峰とは吉野の奥の山を云ふ

螢火やこゝ恐しき八鬼尾谷 田上尼

八鬼尾谷は紀伊國熊野の山中にあり、即ち熊野權現の在します所なり

南天と双ヶ岡の火桶哉 一茶

雙の岡は山城國法金剛院の西北に當り、三つの阜丘相連りたるを云ひ、一の岡、二の岡、三の岡の名あり、古來歌詠の資たること少からず、櫻、堇、躑躅花、蟬、紅葉、鹿等、詩材たるもの多し、吉田兼好も此近邊に草庵を結びたりと

逢坂は關のあとあり花の雲 嵐雪

逢坂の町や針とぐ夜半の秋 几董

逢坂や花の梢の車うし 智月尼

逢坂あふさかは近江國滋賀郡にあり、往昔は日本三關（美濃の不破、伊勢の鈴鹿と共に）の一として名あり

日の岡やこがれて暑き牛の舌 正秀

日の岡は山城國宇治郡にありて山科街道に當れり、其の地勢たるや、三面皆山を負ひ唯東の一方のみ明豁にして、日光を受くること最も早きに因り此名ありと云へり、昔は僅に一徑の通ずるに過ぎざりしが、木倉養和上人の土工を起し、車馬の便を謀りしにより今尙其徳澤を稱す

藥喰人に語るな鹿ヶ谷 蕪村

初時雨雲のはなれや鹿ヶ谷 肅山

鹿ヶ谷しかがたは京都市上京區鹿谷町邊の舊稱にして、如意ヶ岳の麓に當れり、世に鹿ヶ谷の御殿と稱する靈鑑寺あり、鳥羽帝の寵女松蟲鈴蟲

の二夫人が尼となりて遁世せし安樂寺あり、域内老樹巨木枝を交へて風光颯々の趣あり

午時飯の談合谷や閑子鳥 文 鷗

談合谷は前記鹿ヶ谷の域内にあり、俊寛僧都の山莊を結びし地にして、治承年間驕れる平氏を亡さんとて、成親、康頼等と屢々會合せしに、事露はれて鬼界ヶ島へ流されしなり、今は山莊の舊趾二反ばかりの平地荒蕪に歸したる處あるのみ

風を杖につきけり老の坂 智月尼

落鮎や一瀬く到老の坂 米 夫

老の坂は山城國桂の里より檜木原を経て丹波に通ずる山路にあり、これより漸く山續きにて龜岡に至る

道灌や花は其代も嵐哉 嵐 蘭

馬行くや道灌山の冬木立 子 規

道灌山は東京府下の日暮里村にある丘にて、太田道灌の城趾なりと云ひ傳ふれども、實は北條氏康の麾下たりし關小次郎長輝入道道灌の舊迹なりと云ふ

桃山や裾はかり見る人通り 樗 良

桃山は山城國伏見町の東にあり、古は此山に桃樹多かりしに因り此名あり、文祿年間には豊太閤の居城たりしも、後ち徳川氏の爲に毀たれて山林田野となりしが、累々たる廢墟遺迹は今尙昔を偲はしむるに足る

初鶉神路山から起ちにけり 六 花

神路山は伊勢内宮の鎮座まします山の總稱なり

氷魚取るや三上を出る廿日月 髭 風

三上山みかみやまは一名杉山と云ひ、又秀郷の百足蟲を退治したる傳説によりて蜈蚣山とも云ふ、滋賀國三上村にあり、山上より琵琶湖を下瞰して眺望佳なり、古歌亦多し、汽車にて旅行する時は、野洲川の橋上より能く此山を望み見るを得べし

雉子鳴く有王山の岩間哉 握 月

有山王は山城國井手の里に在り、其山間を有王谷又有王芝とも云ふ、是れ諸兄公の曾孫たる有王嘗て此に別莊を置しに因る、元弘の亂に後醍醐帝の敵兵に捕はれ玉ひしも此地なり

善峰の峰光り合ふ茂哉 鱸 江

善峰は山城國乙訓郡小鹽村に屬し、善峰寺の所在地なり。昔し源算此の山嶺に登り、座禪七晝夜に及びし時、忽然として老翁來り告るに、此地に蘭若を開くべきを以てす、然れども地勢險峻にして、奈

何ともすること難かりしに、次の夜多くの猪群れ出で、之を平坦にせしかば、寺院五十有餘を建設し得るに至れりとの傳説あり

鷹か峰光悦住みて櫓火哉 柿 園

鷹か峰は一に高峰とも云ふ、山城國葛野郡紫野の西北にあたり、三峰並び聳ゆるもの是なり、京より丹波へ通ずる行路なりしも、山嶺層重して群盜出沒し、行人を惱ますこと多かりしが、本阿彌光悦、官より此の山地を受け、茲に家居せしより群盜悉く其迹を絶ちたりと云ふ(光悦の事迹は第一門本 邦人物の部に詳なり)

青葉若葉四明か岳の一角に 木 母

四明ヶ岳は比叡山の最高處にして、海拔凡そ一千九百尺に及ぶ、峰上には樹木少く、茅篠の叢生するのみにて、下俯すれば京都全市を指顧すべく、琵琶湖亦膝下にあり、遠くは攝河泉若狹越前等の諸山

悉く一眸の中に屬す、嘗て平將門が藤原純友と共に皇城を俯瞰し、非望の企を爲せしと云ふも此地なり

涅槃會や雲下り來る音羽山 曉臺

音羽山は一に牛尾山とも云ふ、山城國宇治郡に在りて、洛外なる小野醍醐の諸山に連なれり、其懸崖に瀑布あり、音羽の瀧即ち是なり

○附記

あだし野や蛇の衣吹く秋の風 野童

あだし野に春もうけ行く土筆哉 白堂

あだし野は、死者を葬る地にして、即ち墓地のことなり、徒然草に

あだし野の露消ゆる時なく云々

おどろ野や木瓜もなか／＼人を刺す 道彦

おどろとは、荆棘の義にして、雜草木の簇生したる野邊を云ふ

鮎落ちていよ／＼高き尾上哉 蕪村

小男鹿のよひ下る月の尾上哉 關更

尾上は、峰の上の義にして、山のすぐれて高き處即ち巔を云ふ

野ら中に土御門家や冬至の日 太祇

七夕や野らも願の糸芒 一茶

野らの字は助字にして意義なく、單に野と云ふに同じ、飼主のなき野畜を、野ら猫、野ら犬と呼ぶも亦此義に外ならず

すぐる野や翻るゝはかり星の闇 長翠

すぐるは末黒の義にて、即ち燒野の草の末の黒くなりたるを云ふ、

(古語)古歌に武藏野のすぐるの中のしたわらび云々

明星やしめ野の雲雀巢にぞ鳴く 白雄

まめ野は、占野の義にて、我がものと定め、猥りに他人の入るを禁

したる野を云ふ、古歌に——我ものときめ野に飼ひし春駒の手にも
 からすあれまさる哉——とあり○又地名としては標野しほのと書し大和國
 にあり



第七門 河湖、海濱

風の香も南に近し最上川 芭蕉
 毛見衆の船さし下せ最上川 蕪村
 水無月の田に引れけり最上川 長翠
 最上川もがらがはは羽前國にあり、國中第一の大河にして長さ六十二里、廣さは十三丁餘に及ぶ所あり、水勢最も急にして日本三急流の一たり、此河には鮭、鱒、鮎、鰻等の産獲多し

佐保川に鴨の毛捨る夕哉 蕪村
 佐保川は大和國北部なる奈良川の上流の稱なり
 初鮭や市に流る、淺野川 涼菟
 月清し我鮭つかむ淺野川 樽良

淺野川は加賀國河北郡にあり、河北瀨に流れ注ぐ、長さ九里許なり

堀川の畠から立つ胡蝶哉 太 祇

牛蒡引堀川の水も濁るべし 鷺 水

堀川は桓武天皇遷都の時、大内裏の東西に開鑿されし濠渠の一にして、北は一條戻橋に起り市内の西部を南に貫流し上鳥羽に至れり

羽洗ふ鷺も見ゆ紙屋川 几 董

涼しいか秋へ一重の紙屋川 太 祇

鷺の嘴洗ひけり紙屋川 曉 臺

紙屋川は山城國氷室山より源を發し、京都二條城の西を過ぎ、鳴瀧川を合せて加茂川に入れり、俗にかい川と云ふ、昔しは此川にて紙を漉き初めしに因り此名ありと云へり、此川の砂は盆栽の培養に適するがゆゑ、紙屋川砂と唱へ他へ賣出すもあり

十津川や耕す人の山刀 石 波

十津川は大和國吉野郡にあり、多くの溪流を合せ、其末は紀州熊野川に入る、流域廿二里餘

紫陽花の下行く水や飛鳥川 芦 丸

飛鳥川は大和國にあり、大和川の上流なる廣瀬川に流れ入る

横田川植處なき柳哉 尙 白

横田川は近江國にあり、長さ十五里、源を三重縣の連山に發し、近江の野洲に入る、之を野洲川と稱し琵琶湖に流れ注ぐ

狩野川に沿ふてのぼるや虫送 虚 子

狩野川は伊豫國喜多郡にあり

秋涼し雨の過ぎゆく雄上川 樽 良

雄上川は一に雄神川とも書す、越中と飛驒との兩國に屬する射水川

の別稱なり

花の瀬に浮む筏や大堰川

延年

目さむるや花吹きおろす大堰川

橋良

時雨るや小倉は晴て大堰川

梅人

山暮れて霞下せり大堰川

曉臺

短夜の闇より出で、大堰川

蕪村

おほのぼほ大堰川は源を丹波に發し、山城國嵐山の麓を繞り流る、此水流の初め丹波の保津を流るゝを保津川と呼び、嵐山の麓に至りて大堰川の名あり、白河法皇嘗て此流れに舟遊の御催あり、師房卿をして天下の勝地は大堰川に若くものあらじとまで嘆稱せしめたりと云ふ、蓋し嵐山の幽邃と相俟ちて此の趣あらんかし

春月やかち渡りゆく桂川

李村

桂川は前記の大堰川が梅津を過ぎ、桂の里に入るに及びて桂川の名あり、後ち淀川に合流す

五月雨の雲吹き落せ大井川

芭蕉

双六や幼な心の大井川

旨原

五月雨の大井越したる賢さよ

蕪村

大井川夏越の今日や蠅拂ふ

言水

秋凄し金氣溢るゝ大井川

橋良

大井川は駿遠兩國に屬する大河にして、流域四十六里に及び、河口の廣さ半里許に達す、凡そ十六里の間は舟楫の便あれども、洪水ある毎に河の瀬變り易し、往昔東海道五十三驛の旅程中には、出水により此河留めに逢ひて、交通の便を缺きしこと多かりしなり

四方より花吹き入れて鴉の海

芭蕉

秋風も心まゝなり鴉の海 去來
燕の雁に問ふてや鴉まはり 丈草
曳駒の足ひやसानん鴉の海 太祇
夕暮や露のけふれる鴉の海 樽良
鴉の湖とは近江の琵琶湖の異名なり、句作の都合によりては、それを約めて單に鴉とのみ稱することあり、丈草の例句の如き是なり

鳥ども、寐入て居るか余吾の湖 路通

余吾の湖は近江國伊香郡にあり、琵琶湖に連接せる水域なり

名月も老いにけらしな鏡池 野坡

鏡の池は攝津國武庫郡須磨村にあり、昔し中納言行平須磨に配流されし時、憂き夕暮れの徒然に松風村雨と云へる女のもとに通ひけるが、行平都に歸りし後、二人の海女は都のことなど思ひわびて、互

に此池の水に憂き係を映したるにより鏡の池と稱せしなり

清瀧の水汲みよせて心太 芭蕉

清瀧や澁柿さらす我心 其角

鶯に清瀧の浪靜なり 士朗

清瀧は山城國葛野郡嵯峨村にあり、源を小野郷の山中に發し、高雄愛宕の麓を繞りて大堰川に入る、其間危岩突兀として水勢急奔、頗る奇觀に富めり

玉川も井手も藁家ぞ春の月 奇淵

玉川や先づお先へと飛ぶ蛙 一茶

玉川は山城國玉水驛の傍を過ぎ、木津川に流れ入る水路にして、所謂六玉川の一なり、平時は水無く、川床も平地より頗る高し、俗に云ふ天井川是なり、往昔橋諸兄山吹を愛して、此川の汀に植え連ね

られしに依り、山吹と蛙とは此地の名物として聞えたりしも、今は其迹を絶ち、一株の山吹さへ尋ぬるに由なく、只さゝやかなる溝ありて田の中を流れ居るのみ

梅折りに舟呼ぶ多摩の渡し哉

白雄

多摩川の雨や徒鶴の洲に渡る

青嵐

多摩川は源を甲斐に發し、武藏國荏原郡を経て羽田村に入り海に注ぐ、承永年間、此河水を江戸市中に引き用水とす、玉川上水是なり、其下流を六郷川と云ふ

風もうし佐野の渡りの蓼屋敷

其角

馬士は馬うち拂へ佐野の雪

旨原

朱の鞍や佐野の渡りの雪の駒

北枝

秋高く馬肥えにけり佐野の里

秋虎

佐野は上州群馬郡佐野村にあり、其沿岸に巨岩あるは、昔し舟を繋ぎし岩なりと云ふ、古より此地に就て古歌多し、佐野の舟橋も此處なり

名月や神泉苑の魚跳る

蕪村

神泉苑は小野小町が歌を詠じて雨を祈り、其効顯あらはなりしと云ひ傳ふる處にて、即ち京都市上京區門前町にあり、今の地域は東西三十五間、南北四十六間なれども、往時は甚だ廣大なりしとぞ、此苑は桓武帝遷都の際に設け玉ひしものにて、爾後歴代の至尊御遊の仙境たりしなり

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり

來山

四つ橋は大阪市西區にあり、長堀と西横堀と交叉する處に、四つの橋を架し其形井然たり、橋は長からざれども形ちを以て其名聞ゆ

日うつりや高瀬へ分つ春の水 也 好

高瀬川は中古に京都内裏修築の時、其材石を運搬せんが爲め開鑿せし川にて、元來加茂川の一分流なり、此川の通ひ船を世に高瀬の引舟と稱し、伏見より京都に至るの水路とす、其流れ淺くして且急なるゆる、溯るときは舟夫陸に上りて繩を引く、京都市内に於ける流域は、三條大橋より西半丁許にして、三條小橋は高瀬川に架せり、此川の東に沿へる一街を木屋町と稱し、旅亭貸席など軒を並べて般賑の巷衢たり

炭賣や隴の清水鼻を見る 其 角

春雨の中に隴の清水哉 蕪 村

隴の清水は山城國草生村にあり、其名高く和歌諸集に出づ、一説には同國大原野にも隴の清水ありと云へど、こは後世其地名によりて

付會せしものならんと云へり

冷し瓜加茂の流れに枕せん 召 波

加茂川の砂めされけり鶏合 旨 原

加茂川は京都市街の東部を貫流して其下は桂川に合す、市内を通ずる處にて河身の廣きは凡六十間に及ぶ、川床には砂礫多けれども、其清流は東山の翠綠と相映じて市の風致を添ゆ、御幸、三條、四條、五條の四大橋を架せるは即ち此流れなり

陽炎や茶山を越えて木津川原 碧 梧桐

木津川は木津の里を流るゝ川にて、聖武帝の御宇に南都大佛殿建立の時、木材を運びて此里に着し、より木津の名あり、今は山城國南端の一都會にして、奈良より一里半許、布を曝して業とする者多し

屠蘇の悔蟬の小川を渡りけり 鳴 雪

蟬の小川は一に瀬見の小川と書す、山城國愛宕郡にあり、下流は加茂川に注ぎ入る、古歌に——君が代も吾が代もつきじ石川や瀬見の小川のたえじと思へば——とあり

宇治川や吉野の花と散る螢 樽 良

宇治川の水に臂張る蛙哉 桃 妖

宇治川は其水源を琵琶湖に發し、水勢常に滔々として流れ、石山黒津等を経て山を繞り岩を衝き伏見に出で、淀川に合す

鳴瀧や七夕頃の借座敷 青 々

鳴瀧は山城國葛野郡花園村に在り、今の鳴瀧川は紙屋川と合して淀川に入れり、昔は水勢甚だ急にして、鞆々と潭下に落ち、轟然たる鳴響能く遠きに達せしゆる、鳴瀧の名ありと

鴿鴿や走り失せたる白川原 氷 固

白川に秋風早き礎哉 越 樓

白川は京都銀閣寺の北にある地名にして、川は民家所在地の中央を流る、即ち名所三白川の一たり、此地は京より滋賀坂本への往還にて、白川越又は志賀山越とも云ふ、俊頼の歌に——白川の春の梢を見わたせは松こそ花の絶間なりけれ——とあり

遣羽子や打出の濱の友千鳥 重 厚

甘酒屋打出の濱に卸しけり 青 々

打手の濱は攝州武庫郡にあり、神皇功后三韓を征し恙なく凱旋したまひし時、庶腹の皇子等謀る所ありて、皇后に鋒を向けんとし、軍を此處に出し、ことあり、故にうち出と云ふに至りしとぞ

月よ花奈古の磯家の胡瓜揉 曰 人

奈古の濱は伊勢の國河曲郡にある一帯の海濱を云ふ、白砂青松の眺

め甚だ佳なり、此海濱には春夏の頃往々蜃氣樓なるものを現出し、山川樓閣人畜等朦朧として観るを得べし

少將の尼の咄しや志賀の雪 芭蕉

花に今眼入けり志賀の浦 去來

秋偶まつゝじ花咲く志賀の里 蕪村

志賀の浦は近江國又筑前國にもあれど、茲にては近江國にあるを指せるなり、古歌に……小夜更るまゝに汀や氷るらん遠さかりゆく志賀の浦浪……とあるも是なり

短夜や足跡淺き由井ヶ濱 蕪村

足跡に松の落葉や由井ヶ濱 靜帆

由井ヶ濱は相模國鎌倉郡にあり、七里ヶ濱の東に連れる海濱一帯の名なり、頼朝以後鎌倉歴代の將軍が、弓馬の術を練りし所にして風

光頗る佳なり

家並や鳥賊干す加田の朝日和 干魚

加田は一に加太とも書す、紀伊國海草郡にある港にて、紀の川の注ぎ口に當れり、和歌山市より凡三里許

象潟や雨に西施の合歡の花 芭蕉

象潟や稻木も綱の助け杭 言水

象潟は羽後國象潟町にちり、古より天下の名區なりしに、文化元年地震の爲に湖底隆起し、水涸れて島のみ残りしが、松を伐り島を崩して田圃となし、今は舊記によりて僅に其面影を存するのみ、往昔は潟の東西二十丁、南北三十丁に及び、九十九島八十八潟ありしと、其勝景たりしを想ふべし

ひたるさよ寒さよ須磨の磯千鳥 芭蕉

霧汐煙行末かけて須磨の浦
 師走哉餅つく音の須磨の浦
 行年や千代の千鳥の須磨の浦
 見に来る人かしましや須磨の秋
 波風に磯馴芋莖や須磨の里
 尿りせし蒲團干たり須磨の里
 松風は須磨の寐覺ぞ寶舟
 三日月の浪にさはるや須磨の浦
 立琴に須磨の松風通ふらし
 秋の海須磨は雨ふる月夜哉
 我須磨の關守ならん閑子鳥
 朝霧やまだ夜の明けぬ須磨の宿

其角
 凡兆
 巢兆
 言水
 旨原
 蕪村
 蓼太
 可全
 鷹丸
 靜志
 調柳
 士常

藍色の海の上なり須磨の月
 雁鳴や須磨の浦人藻汐焚く
 薰風や須磨の宿屋の青簾
 須磨の冬松の行平寒げなり
 須磨の浦や月に悲しき蟹が顔
 須磨の猫明石の猫に通ひけり
 須磨の浦や月温き西曇

子規
 鳴雪
 格堂
 香墨
 霽月
 樽堂
 碧梧桐

須磨の浦は攝州武庫郡にあり、古より有名の勝地にして風光絶佳なり、往昔は須磨十景の目ありしと、今は諸國より痼疾者の來りて靜養するもの多く、あたらし幽清の勝地を俗化し了らんとするは惜むべし○附言 其地誌の一斑を説くには、茲に列記せし如く多くの例句を擧ぐるに及ばざれど、古今の文人詩客が如何に此地に眷戀すると

の深かりしを示さんため、數十家の作を擧げたるのみ、若し此他の
例句をも悉く網羅せんには、恐らく僕を更ふるも盡し難からん

蝸牛角ふりわけよ須磨明石 芭蕉

鳴く千鳥幾夜明石の夢驚く 其角

蛤に明石の闇もゆかしけれ 撫泉

面楫や明石のとまり時鳥 荷兮

明石は播州明石町の濱邊の總稱にて、柿の本人磨の……ほのくくと
明石の浦の夕風に……と云へる和歌を始めとし、古來此地の勝景を
詠じたるもの多し

こよろぎの磯魚買はん夕涼み 几董

聖靈や今こよろぎの磯の浪 句空

こよろぎはこゆるぎ(小餘綾)の磯のことにて、相模國にあり、今の

大磯海濱を指稱す、近來は海水浴場として最も名あり

新海苔や誰が袖ヶ浦紺ちゝぶ 古白

海苔の香や誰が袖ヶ浦と古人の句 碧梧桐

袖ヶ浦は相模國鎌倉町大字坂の下なる稻村崎の海濱を稱す、其形ち
袖の如きゆる此名あり、定家卿又は西行法師の歌に詠せしもあり○
一書に袖ヶ浦と云ふは羽前國袖浦村に屬する沿海一帶の稱にして、
相州鎌倉にあるは袖の浦と云ふとあり、然れども茲に擧げたる例句
は後者を指せしにあらざるべし

與謝の海や藍より出で、夏木立 鳴雪

歸る帆に燕のせて與謝の海 明庵

與謝よさの海は丹後國與謝郡にあり、天の橋立の左右に於ける海灣の名
にして風光明美なり

水鳥の石川島を洲濱哉 旨原

石川島は武藏國隅田川の河口にあり、其南には佃島あり

裾ぬる、浪や七里ヶ濱千鳥 几董

暮遅し七里ヶ濱の手繰網 青嵐

七里ヶ濱は相州鎌倉郡腰掛津村の海濱を云ふ

嬉しさや江尻で三穂の十三夜 其角

春風や三保の松原清見寺 鬼貫

三保の松原は静岡縣安倍郡三保ヶ崎にあり、一帶の長洲斗出するこ

と一里許にして、白砂青松相連れり、其ほとりに古松一株あり、高

さ九丈餘、名けて羽衣の松と云ふ、昔し天女あり羽衣を此松にかけ、

漁父の爲に奪はれて天に歸るを得ず、終に漁父に嫁したりとの傳説

あり

鷹一つ見付けて嬉し伊良古崎 芭蕉

枯萩や日和定まる伊良古崎 子規

伊良古崎は三河國渥美半島の岬にして伊良古村の西に斗出す、航行

危険の虞多しとて、舟夫の意を用ふる所なり

初鰯や雪に曇れる經ヶ崎 失名

經ヶ岬は丹後國竹野郡の海に斗出する所にして、岬上に燈臺あり、

風濤荒き海岬たり

水鳥や巨椋の舟に木綿賣 蕪村

巨椋をくらの池は一に大池とも云ふ、伏見町の南端なる觀月橋を去る十四

五丁の距離にあり、蓮の名所として聞ゆ、池の中央を横斷する道は

豊公の築きしものなり

長池に栖む甲斐もなし鴨の脚 立圃

長池は山城國長池村にあり、昔は南北三丁餘、東西二丁餘の大池なりし爲、此の村名の因りて起りし程なり、昔時は此池に大蛇栖みて人を害せしと云ひ傳ふも今は其池の迹かたすらなし

名 月 や こゝ、住吉の佃島 其 角

佃島は東京隅田川の河口にあり、初めは攝津國の住吉神社を移して宮居を作りし地なりと

渦 卷 いて 春の 潮 落 つ 四十島 霽 月

四十島は伊豫國温泉郡高濱港に沿へる海中の一孤島にして、潮流の激しき處なり

○附 記

又 越 ゆる せゝらぎ川や 春の 草 季 遊

せゝらぎに うつゝ、水鶏に うつゝ 哉 六 花

せゝらぎは、細流のことにて、古語のせゝなぎ(細流)に同じ

枯 芦 や 難 波 入 江 の さゝら 波 鬼 貫

さゝら波は、さゝなみ(小波)に同じく、一に細波又は漣漪とも書す

凧 こゝ、にも すむ や 潦 園 風

潦は、にはたすみと訓む、雨後に道路又は庭上に水の溜れるものを云ふ

こもり江や 雲母 浮く 水に 鳴く 蛙 召 波

御藏木に また こもり江の 蛙 哉 蓼 太

こもり江とは、こもりぬ(隠沼)、こもり石(隠石)、こもりづ(隠水)のこもりと同じ義にして、即ち物かげになりて見えぬ江を云ふ

早 稻の 香や 分け 入る 右は 有磯海 芭 蕉

有磯海は、ありそうみと訓み、又荒磯海とも書す、即ち荒磯のある

海を云ふ

逝水や椿流る、竹の奥 芭蕉

逝水とは、野原などを流る、根なし水のことにて、人に逃げまはるやうな意なり、初めは渺茫たる武藏野に於ける水のみを用ひたる語なりしも、後には一般に應用するやうになれり

御近習や花のこなたに片男波 其角

片男波は、浪に男波女波の打寄するさまあるを、其女波なくして男波ばかり片寄せる義に解したるなり、まかし、かたをなみと云へる語原は——鴻を無み——の義にして、海の干潟の無くなりしとの意なるに、後世轉訛して片男波の文字を擬當するに至りしならんとの説あり

第八門 建築物

第一類 神社

卯の花に貴布禰の笠子の箒哉 召波

卯の花や貴布禰の神女の練の袖 蕪村

時鳥貴布禰に通ふ禰宜一人 來山

山吹も散らで貴布禰の時鳥 維駒

貴富禰は貴船又木船とも書す、愛宕鞍馬の諸山と並立す、官幣中社たる貴船神社の所在地にして山城國にあり、請雨又は止雨の祈願いやちこなりと云ひ傳ふ、社の境内は頗る幽邃閑寂にして檜杉鬱生し、凄凉の氣、膚にせまるの感あり

時雨來る空や女中の多賀詣 去來

道ばたに多賀の鳥居の寒哉 尙白

多賀神社は近江國犬上郡多賀村にあり社格は官幣中社なり

粟島へはだし参や春の雨 蕪村

粟島は何れの地方にも祀れる祠にして、本社は何れなるか明ならずとの説あり、蕪村の住みし京都にも、今の停車場より西五六丁の處に粟島堂と云へる社祠あるにより、此句にてはそを指し、ものならん、女の腰より以下の諸病祈願の神なりと云ひ傳へり

谷底の榛名神社や閑子鳥 紫人

榛名神社は群馬縣群馬郡に祀れる郷社にて彦由支命を祭れり

晴れきつてお寒からうぞ龍田姫 乙二

世に古き梢の秋や龍田姫 涼湖

龍田姫は龍田山の神より事起りて、紅葉を詠するがゆるゑ、秋色を染

め成す神の義と解し、秋の造化の神としてたへるなり

佐保姫の文の便りか歸る雁 許六

佐保姫の野路に立たる小旗哉 巢兆

佐保姫は春の造化の神を云ふ、元と佐保山の神より事起りて、佐保山の霞の色に寄せて春を染めなす神とせしなり

山姫の染売流す紅葉哉 其角

山姫や鹿の子白無垢土用干 素堂

山姫とは山を守る女神を云ふ、古今集に——たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん——とあり

神の子に追はれて上る雲雀哉 子規

波間より神の子あまた霞むらん 霽月

神の子とは、西洋の宗教畫などに裸體の兒童に羽を着けて、空中を

飛揚せしめたる想像畫を指せるなり

交代の葉守の神や初柏 其角
一籠は葉守の神へ柏餅 月居

葉守の神とは樹木を守る神の義なり、一説には柏の葉を守る神なりとも云ふ、古歌に——ならの葉の葉もりの神のましけるを知らでぞ、折したゝりなさるな——とあり。

菜の花に阡陌の神の灯哉 長翠

阡陌の神とは街路を守る神を云ふ、史記に阡陌を開くの語ありて、阡陌とは南北の街路なりとの註あり

松の尾に杜氏通夜して雫菊 起波

松の尾に通夜せしと云ふは、松尾神社に參籠せしにて、此社は山城國大原野神社と共に官幣大社なり、京都西山の麓を傳ひ、嵐山に到

る途中の山田村にあり、殿樓の結構井然として、老松古杉のために神寂びぬ、社頭亦楓櫻少からず

月に名をつゝみかねてやいもの神 芭蕉

いもの神とは疱瘡(天然痘)神を云ふ

野の宮の鳥居に蔦もなかりけり 芭蕉

野の宮とは京都嵯峨野に於ける齋宮の場所を云ふ、往昔皇女をば伊勢太神宮の齋宮に立て給ふとき、洛外の地に假宮を建て、其處にて數ヶ月の間潔齋をつとめられ、然る後ち伊勢へ立ち玉ひしを、野の宮の別れと云へり、其起源は垂仁天皇の朝に、皇女倭姫命をして天照皇太神に奉祀せしめ玉ひしに始まり、後鳥羽天皇の御代まで繼續したりしが、其後は兵亂の爲に廢絶するに至れり、今は荒廢に歸し、祠前に黒木の鳥居と小柴垣とあるのみにて、そゞろに昔を偲ぶべし

となり

白梅や北野の茶屋の角力取

燕村

北野神社は官幣中社にして京都にあり、村上天皇の御宇に創めて奉祀せしものにて、都下有数の大社たり、境内には老松蒼鬱たる間に、紅白數百株の梅樹を栽植し、神徳特に馨しき思あり

若竹に河伯を祭る民家哉

巨口

河伯とは川を守る神なり、古歌に——今ぞしるかはくと聞けば君がためあまてる神の名にこそはあれ——とあり、又河童(かつば)の義に用ふることもあり

腹悪しき僧も餅喰へ城南神

燕村

城南神(城南宮)は山城國上鳥羽村に在り王城の南にあるを以て此號あり

【第二類】寺院

木母寺に歌の會あり今日の月

其角

木母寺の灯に見る秋の行衛哉

曉臺

木母寺の鐘の真似して鳴く水鶏

一茶

木母寺は東京隅田川堤の傍にあり、堂前に梅若塚あるを以て知らる、梅若丸は吉田少將維貞の子にて、人買の爲に拘かされ、茲に來りて死せしと云へる、いとも憐れなる傳説あり

歸り咲く八重の櫻や法隆寺

子規

法隆寺は大和國生駒郡法隆寺村にあり、厩戸皇子の創立にして大小の堂宇多し、就中、金堂五重塔などの結構は雄大絶倫を以て名あり

冬枯や平等院の庭の面

鬼貫

平等院は京都久世郡宇治町にあり、寺中に鳳凰堂あり、明治廿七年米國シカゴ府にて世界大博覽會を開きし時、我が政府は此堂の模造を出品し、藤原氏全盛時代の建築の様式を示したることあり

紅梅や柱かゝやく誓願寺 國雲

誓願寺は京都新京極にあり、昔は此寺の境内廣くして、有名なる數株の紅梅ありしも、新京極の道路開通の時、痛く境内を減縮されたり

夢明けて浪のり舟や初瀬寺 嵐雪

春の夜は誰れか初瀬の堂籠 曾良

頭巾着て聲こもりくの初瀬法師 蕪村

とや角と馴れし夜寒や初瀬籠 不曲

初瀬寺は大和國初瀬町の北端泊瀬山はつせやまにあり、故に泊瀬寺はつせでらと書し、又は長谷寺はせでらとも書す、其由緒甚だ古く、寺院の結構も亦壯大にして國

内稀有の名刹なり、長谷の觀音と云へば西國巡禮三十三ヶ所中にて賽者最も多し

六阿彌陀かけて鳴くらん時鳥 其角

六阿彌陀とは六つの阿彌陀を云ふ、東京西京を始とし其他にも祀れり、世俗には春秋二季の彼岸の入りに、此の六佛に詣づれば、特に佛の利益を得ること多しと云へり

競ひ打つ五山の鐘や夕時雨 子規

聞き盡す五山の鐘や大三十日 燕洋

五山とは五箇寺の義なり、京都の五山は相國寺、東福寺、建仁寺等にして、鎌倉の五山は建長寺、圓覺寺、壽福寺等を云ひ、天竺の五山は祇園精舎、竹林精舎、大林精舎等なり

三代の木像寒し等持院 笠堂

等持院は京都府葛野郡衣笠村にあり、足利將軍義詮の創建して父尊氏の廟塔としたるより、爾來足利氏歴代の木像を安置せり

生海苔の波打ち際や東海寺 召 波

東海寺は武藏國品川町にあり、開山は有名なる澤庵和尚なり

からくと柳枯れけり空也寺 長 翠

空也寺は空也堂のことにて光勝寺を云ふ、京都市下京區四條坊門堀川の東にあり、空也上人の創立に係る

春の夜の爪上りなり瑞巖寺 乙 二

瑞巖寺は宮城縣宮城郡松島(日本三景の一)にあり、境内幽邃にして東奥に於ける禪刹の冠たり

三ツ七ツ標て梅あり双林寺 三 弄

双林寺は京都にあり、西行法師の閑居せし所なるを以て名を知らる、

寺内に西行庵西行櫻等の遺迹あり

黄昏や萩に鮎の高臺寺 蕪 村

高臺寺は前記双林寺の南隣にあり、豊臣家の菩提所にして寶物の觀るべきものあり、又境内に萩あるを以て世に知らる

妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋 几 董

妓王寺の鐘より淋し門砧 道 彦

竹の葉や妓王寺の鐘に散やす 素 柳

妓王寺は祇王寺のことにて、京都小倉山なる二尊院より程遠からぬ山中に在り、阿陀彌佛を本尊とせる尼寺なり、一時は全く荒廢して其迹を失はんとせしも、近來有志の人相謀り、さゝやかなる尼庵を建て其遺迹を全うし、清盛の嬖妾たりし祇王、祇女、佛などが、此寺に遁世したる因みにて、今も其の尼像を安置しありと云ふ

行秋や戀塚寺に灯の見ゆる
林鳥
戀塚に心ありてや男郎花
斜嶺

戀塚寺は文覺上人の開基にして、山城國紀伊郡下鳥羽村にあり、傳へ云ふ遠藤盛遠が渡邊渡の妻袈裟御前を殺し其首を葬りし處が即ち戀塚にて此の寺内に渡邊夫妻の碑あり、又上鳥羽にも戀塚あれど眞偽詳ならず

耳塚に月ぞかゝれる時鳥
露吹
耳塚に取出してあり蝸牛
示竹

耳塚は京都市内の豊國神社の前なる路傍にあり、豊公征韓の時、敵の首を得ること多きも、悉く本邦に携へ歸り難きにより、其耳のみをそぎ取りて之を鹽藏し、茲に埋めたる塚なりと云ふ

初寅や櫻寂しき鞍馬寺
芝友

鞍馬寺は山城國愛宕郡鞍馬山の半腹にあり、藤原伊勢の創建にして毘沙門天を祭れり、壽永の頃、後白河上皇始めて當寺に行幸ありしより、爾來帝室の崇好最も篤かりしとなり、其地域は鞍馬の深山に盤踞し、老杉古松蒼鬱として晝尚暗く、冷風肌膚を襲ひ、毛骨悚然たる思あらしむ、寺域の内外に古迹多し

今や旅高觀音を湖に見て
其角
雲の峰高觀音を離れたり
龜友

高觀音は近江國大津市にあり、琵琶湖の眺望大に佳なり
たかくわんおん
春月や印金堂の木の間より
蕪村

印金堂は京都高雄の途上なる鳴瀧村明光寺の紫金臺に建立したる堂宇なり、明暦年間、豪商絲屋九右衛門なる者、花模様の印金を捺し美麗を盡し、ものなりしと云ふも、今は荒廢して僅に螺鈿などの殘

れるを見るのみ

散り初めて紅葉に寒し東福寺 涼 菴

木枯や松は久しき東福寺 成 美

東福寺は京都市下京にあり京都五山の一たり、又東京芝區泉岳寺の南隣にも同名の寺あり

靈山の麓に白し菊の花 子 規

靈山は京都市の附近にて最も眺望の宏豁なる位置を占む、古より此地には墳墓を營む者多く、明治維新の功臣たる木戸孝允氏の墓も亦此山腹にあり

冷かな鐘を撞きけり圓覺寺 漱 石

圓覺寺は相模國鎌倉郡小坂村にあり、鎌倉五山の第二に列する寺なり

行く水や竹に蟬鳴く相國寺 鬼 貫

相國寺は京都市上京區今出川烏丸東にあり、將軍足利義滿が勅を奉じて創建せしものにて、臨濟宗五山の第三位たり

鶏頭や松に並びの清閑寺 其 角

鶯の七つとまりや清閑寺 曉 臺

清閑寺は京都下京區清水坂の上方なる清水寺の東南山深き處にあり本尊は千手觀音なり、堂後の山に郭公亭あり、時鳥を以て名あるがゆるなり

菽入を守れ子安の地藏尊 燕 村

子安地藏尊は諸所に祀れるものあれど、山城と丹波との境に負の坂と云へる峠の頂上の道端にあるは最も世に知らる、京都より凡そ三四里の距離なり

むくと起て雉追ふ犬や寶寺

蕪村

寶寺は山城國山崎村にあり、山崎停車場の附近にして汽車中より其寺塔を見ることを得、此寺は聖武天皇の本願により行基の建立せしものなりと云ふも今は衰頽に歸せり、打出の小槌は此寺の寶物にして、こは龍神の化現し來りて聖武帝に奉獻せしものなりとの俗説あり、天正年間、山崎合戦の時には豊公の本陣を此寺内に構へしと云ふ

五月雨る、黄昏る、祇園長樂寺

虚吼

長樂寺は京都下京區圓山公園内にあり、桓武天皇の創建にして傳教大師の開基たり、其地宛も唐土の長樂精舎に似たりと云へるを以て、長樂寺の稱起れり、中世には痛く荒廢に歸し、近時本堂鐘樓等を再建せしも、境内は漸次狹小となれり、而かも西國三十三ヶ所中の第十

五番の札所たり

蚊遣火やつとめはじまる國分寺

五晴

國分寺は天平九年聖武天皇の御宇天下六十六州に令して各地に國分寺を建立せしめ玉へり、故に京都を始めとし諸國に此寺迹の存するもの多し

仁和寺や門の前なる遠砧

几董

仁和寺は山城國葛野郡花園村字御室にあり、仁和四年の建立なり、素と光孝天皇の勅願に因り、創始したる巨刹にして、皇子皇孫連綿として歷世其の門主たらせ玉ひ、明治維新の頃まで幾んど一千年の久しきに及べり、寺域の内外櫻樹多し、所謂御室の櫻是なり(御室のとは第五門御室の部に詳なり)

蟬涼し 鳥隣は鶴林寺

洗耳

鶴林寺は大和國生駒郡にあり、一名鬼取山とも云ふ、昔し役優婆塞たんのうはそく此山にて鬼を呪縛したるに因り此名ありとぞ

茶の花の香や冬枯の興聖寺 許 六

興聖寺は山城國宇治郡の南部朝日山の半腹にあり、寺前の左右には櫻紅葉を植付け、山吹を透垣とし幽境賞すべし朝日山は第六門山丘の部に詳なり

鶯の寂光院に老いしより 虚 吼

寂光院は山城國大原村字草生にあり、昔し高倉帝の中宮清盛の女平家滅亡の後、西海より歸りて此處に閑居したまひし舊址なり、其後は淀君によりて再興されしことあり

時雨るゝや時雨の中の一心寺 來 山

風呂吹や蕪の中の一心思 月 居

一心寺は大坂市南區にあり、大坂冬の役には徳川家康此に陣營を置

けりと云ふ

春の日や建仁寺へも参りけり 大江 丸

建仁寺は京都市下京區内にあり、臨濟宗の五山の一たり、素と土御門天皇の御宇に、源頼家此地を寄附し、勅願によりて建仁二年に造營したるがゆゑ、年號を取りて名づけしなり、殿堂屢々火災に罹り、輪奐の美昔日に及ばずと雖も、今尙洛中の巨刹たるを失はず

曝涼の勅使向ふや東大寺 一 簀

東大寺は大和國奈良市にあり、華嚴宗の大本山にて、寺域六萬坪餘、寺内に有名の大佛殿あり

花散りて又静なり園城寺 鬼 貫

園城寺は近江國大津にある三井寺のことなり

秋風や鰐口さひる彌勒堂 關 更

未^み勒^りは梵語にて菩薩の義なり、未來を司ると云へる未勒佛を祀りし堂宇は、總べて彌勒堂と云ふ

時鳥おちかへり啼け百萬遍 立圃

百萬遍は智恩寺の異名にて、京都大學の裏手なる田中村にあり、後醍醐帝の御宇に、疫癘流行の際、勅を下して一七日の間念佛百萬遍を修せしめ玉ひしに因り此名あり

髮結の菊や今年も南禪寺 角巾

南禪寺は京都五山の一にて境内甚だ廣く、金地院天授庵等あり、何れも林泉の觀るべきもの多し、又萩の名所たり

五月雨の降り残りしてや光堂 芭蕉

光堂とは金色堂を云ふので、金屬類をもて赫奕と裝飾せしに因り斯の稱あり、此句にある光堂は奥州中尊寺内にありしを指しなり

蒟蒻につゝじの名あれ太山寺 子規

太山寺は四國八十八ヶ所巡拜所の一つにて、伊豫國松山を距る一里許の北にあり、名物に蒟蒻を賣るよりして此句あり

鎖あけて月さしいれよ浮御堂 芭蕉

浮御堂は近江國の堅田崎にあり、即ち琵琶湖中に架せる小閣にて、中に佛像を安置せり、横川の惠心僧都の創立する所なりと云ふ

智恩院の一重櫻は咲にけり 蕪村

降る雨も小雨なりけり智恩院 一茶

智恩院は京都華頂山の麓にありて、圓山祇園の北に位す、城内老松鬱々として其間櫻樹を交ゆ、觀賞するに足る、又寺内に高さ一丈八尺の大釣鐘あり、法然上人の忌日に之を撞きて法會を營む、即ち御忌是なり

勸修寺は藁屋の宮や梅の花 許 六

勸修寺は山城國山科村大字勸修寺にあり、昔しは伽藍悉く備はりしも、今は荒廢して其壯嚴を見ず

線香や平内堂の春の雨 一 茶

平内のぐるりに暑し小平内 子 規

平内堂は東京淺草觀音の境内にあり、堂の内には久米の平内が袴を着て踞坐したる石像を置けり、其周圍に同じ形の小さき石像を並べ据ゑたるのが小平内なり

春の夜の月よりあけて天龍寺 曉 臺

天龍寺は京都の近郊にある寺院にして、往時は壯嚴なる山門ありて規模宏大なりしも、今は苔むす礎石の諸處に散點するを見るのみ、併し域内には今尙老松巨柏の枝を交へて、林泉の幽趣掬するに足る

ものあり

馬下りる小督の塚や百合の花 青 嵐

小督塚は京都嵐山の麓なる大堰川の北岸林叢の中に在り、一説には是れ後世に至りて随意に設けしものと云へど如何にや

冬木立此道ゆけば鬼子母神 森 田

鬼子母神(さしぼじん又さしもじん)は女體の佛の名なり、此の佛神は其子甚だ多くして、非常に之を鐘愛すと云へり、始めは他人の子を奪ふて其血肉を食ひしが、或る時佛の爲に其子を隠されてより大に悲み、遂に前非を悔いて、佛果を得るまでに得道せしものと云へり、是より轉じて多くの子を持つて女をも斯く稱することあり

星合や双林塔の鐸の音 其 角

双林塔は一に相輪様と書す、桓武天皇平安城創定の際、傳教大師が

金造の相輪様を營み、王城の鎮護として比叡山に建立し、内に數百卷の經文を藏めたるなり(他の巨剎の境内にも此類を設けたるあり) 出代や六角堂の縁もあれ 氷花 六角堂は京都市内の六角通り烏丸東にあり、弘仁十三年嵯峨天皇の勅願所となり、長徳二年花山上皇行幸し玉へり、是れを西國巡禮の權輿なりと云ふ

北は黄に銀杏を見ゆる大徳寺 召波 大徳寺は山城國愛宕郡大宮村字紫野にあり、創建より年を経ること五百有餘年に及び、臨濟宗の大本山として巍々たる伽藍は、實に都下屈指の一たり

第三類 樓閣、亭舎

初冬の竹緑なり詩仙堂 鳴雪

秋日和鉦豆干しぬ詩仙堂 露石

詩仙堂は京都府愛宕郡修學院村にあり、石川丈山(丈山の事は第一門の人物の部にあり)の閑居したる遺址にて、堂の楣間には漢土三十六詩仙の畫像を掲げ、付するに各々詩一首を以てす、丈山の遺琴劍硯等其儘に存しあり、庭内頗る閑寂の趣に富む、嘗て靈元上皇の臨幸し玉へることあり、其幽境なるを想ふべし

山蜂や木の丸殿の雨の中 蕪村

木丸御所(このまるとしよ)は崇徳天皇行宮の地にして、讚岐國綾歌郡鼓ヶ岡にあり、地は一堆の丘阜にして小祠建てり、里人之を天皇社と云ふ、長寛二年終に此處に崩し玉ひ、其靈を祀れるもの即ち此の天皇社なり

花の山二丁上れば大悲閣 芭蕉

風や瀧の上なる大悲閣

碧梧桐

大悲閣は京都嵐山の半腹にあり、麓より上ること五六丁許、本尊は千手観音を祭り、閣の前には保津川を開通せし角倉了意の記念碑あり、閣の西北に當る山麓には鑛泉場あり、此ほとり一帯に勝景多し、

鶯の鳴くや師走の羅生門

蕪村

羅生門は謠曲に記するものにて、實は羅城門のことなり、羅城門は桓武帝奠都の時、平安城の外廓南大門として建設し、樓上に閣あり、結構壯麗を極めたり、嘗て都良香が此門を過ぎ、氣霽風櫛新柳髪と詠せしに、樓上に聲ありて、氷消浪洗舊苔鬢と應したりとの傳説あり、今は其樓門の礎石だになし

なつかしや勸學院の時鳥

許六

勸學院は淳和天皇の御宇天長三年に藤原冬嗣の建てたる學校にて、藤原氏一門の子弟の學問する所たり

縫殿の陣のさよめや星祭

許六

縫殿は縫殿寮のことにて、往昔は禁裏の中務省に屬し、衣服裁縫の事を司どりし所なり

物あぶる染殿深し五月雨

太祇

染殿は昔し禁中にて布帛を染めし處を云ふ

都督府樓は畑となりて花大根

花村

都督府樓は都府樓のことならん、都府樓は天智天皇の時建設せられたる官舎にして太宰府にあり、菅原道真公謫居の詩に——都府樓纔看三瓦色、觀音寺只聽鐘聲——の句あり

白梅や墨芳はしき鴻鷗館

蕪村

鴻臚館は支那にて使臣をもてなす處を云ふ、初めは鴻臚寺と云びしを、後に館と稱するに至れり、我國にての鴻臚館は、韓使を接待する爲に設けし處にて、高麗館、百濟館、三韓館などあり、之を難波大郡の客館と稱せしも今は無し、只三韓館のみは眞田山の北一丁許の處に舊址あり、字を唐居殿（かじみどの）とも云ふ、今は大坂市の東區に屬す

粥杖や梨壺の五人打はつし 几 董

梨壺の使の童明の春 虛 子

梨壺の君醉せけり年男 雪 江

梨壺は舊内裏六舎の一たり、梨壺の五歌仙、梨壺の七歌仙など云へるあり、赤染衛門、紫式部、和泉式部、伊勢太輔、馬の内侍は即ち梨壺の五歌仙なり

彼岸會や洩れじと潛る阿字の門 虛 子

阿字の門は眞言宗の門なり、佛教密秘の教義あり、阿字三觀を以て立教とす

凍解や中に目出たき日の御門 爪 流

日の御門（ひのかど）は檜御門（ひのみかど）に同じ、即ち檜の木にて作りたる門を云ふ

華清宮の鎖されてある牡丹哉 松 竹

華清宮は明皇雜記に「天寶六年更（よ）温泉（ノ）曰（ク）華清宮、湯治井爲（シ）池」とあり、我國の湯泉館の如きものならむ

夏瘦や楚臺の月に雪薄し 椽 面坊

楚臺は雲夢の地にある高臺の觀を云ふ、觀とは我國の所謂物見臺の如きものなり

冬木立黃鶴樓のあともなし 露 月

衣更（きさら）て黃鶴樓に上りけり 霽 月

黄鶴樓は崔顥の詩に——昔人已乘白雲去、此地空留黄鶴樓——の句あり、述異記に——荀環憩江夏上望西南有物飄然降白雲漢乃駕鶴之賓也、賓主歡對辭去、跨鶴騰空、眇然烟滅（佩文韻府）とあり、是れ黄鶴樓の由來なり

浮ふ瀬に沓並べけり春の暮

蕪村

浮瀬や一つで年を忘れ貝

龜文

浮む瀬は昔し攝州天王寺の西新清水に隣りし料理亭の名なり、同家に大なる鮑壳あり、其孔十一ありしを、悉く塞ぎて酒盃となし、之を浮む瀬と名づけしにより此稱あるに至りしとぞ

南大門建てこまれてや鹿の聲 正秀

南大門は京都の朱雀大路（今の千本通り）に建てありしもの、羅城門是なり

梅漬を乾すやぐるりは正木垣 衣吹

正木は木の名にして、其高さ丈餘に及び、葉は楕圓形にて質厚く、色は深緑を帯び、秋は南燭の如き實を結ぶ

田舎間のうすべり寒し菊の宿 尙白

避暑の客銀屏に京間疊哉 碧梧桐

田舎間は疊の長さ五尺八寸にして、京間は六尺三寸なるを云ふ○薄縁は疊の表ばかりなるに、縁を取りたる薄き敷物のこと

蔓草の凍からみたる垣穂哉 保吉

秋來ぬと目にさや豆の垣穂哉 田福

垣穂とは垣の末の方を稱するに用ゐ、又蘆荻などを穂と共に結べる垣をも指し、又は單に垣の意義として汎く用ふることあり

卯の花やかさあげ城の湛え水 召波

かきあげ城(搔揚城)とは、濠を掘り未だ水を通せずして、半ば築きたる城を云ふ

魂祭母屋の妻戸の音は何 嵐 雪

紅梅に娘住まする妻戸哉 杉 風

妻戸とは椽の端などに設けて、兩方に開くやうに作りたる戸を云ふ、即ち開き戸の一種なり

かりくらの失來出來たり暮の春 召 波

狩倉の露に重たき鞠哉 蕪 村

狩倉は一に狩座と書す、即ち狩をする所にて狩場とも云ふ

蜂とまるる木舞の竹や蟲の糞 昌 房

木舞こまの竹たけとは、丸窓などに壁下地の丸竹の出でしものを云ふ、即ち窓の中に縦横に貫きたる竹なり、又壁身の竹の汎稱にも用ゆ

東雲やまいら戸はづす飾り松 濁 子

まいら戸は、まいら戸(間平戸)のことならん、間平戸とは板の表に横木を多く打ちたる作り方にして、玄關の戸などに多く用ひたるあり

蔀あけてくゝたち買はん朝未明 嵐 雪

淡雪の蔀下ろせば雨夜哉 蓼 太

蔀しよみは、神社佛閣又は高貴の邸宅にて、日除け風雨除けのために用ふる戸を云ふ

這ひ出でよかひ屋が下の蟾の聲 芭 蕉

かひ屋(飼屋)は蠶を飼ふ家を云ふ、即ち蠶飼ふことをこがひ(蠶飼)と云ふにより、單にかひ屋と稱して養蠶の家屋と解するなり

瀧口や思ひ捨てゝも池の鴛鴦 其 角

瀧口に灯を呼ふ人や春の雨 蕪村

瀧口とは御所内に於ける武士の詰所を云ふ、元來は御殿の湯が瀧のかたちをなして流れ出る所に、武士の詰所の設けありしゆゑ、其處に詰め居る者を瀧口の武士と呼ぶに至りしとぞ

風呂吹や埴生の小家に雲を蒸す 青々

埴生は埴土のある土地を云ふにより、僻地に設けたる住居を埴生の家と云ふ、はにはねばつち、へなつちのことなり

春の夜を更かす人あり三軒家 碧梧桐

三軒家とは京都大堰川のほとりにて嵐山の勝景を眺むる酒樓なり、蓋し三軒家と稱するは他の地方にもあれど、京洛の勝地にあるため、只三軒家と云へば此處のこととゆるさるゝなり

短夜を慶雲宮の警固哉 鷗盟

慶雲宮は朝鮮國王の宮殿の一なりしも往年の亂にて焼失したり

ませ垣に生りしやうなり枝取 里水

ませとは柴垣のことにて、即ちまがきを云ふ、古歌に――ませの内に移し植にし藤ばかま――とあり

雪散るや穗屋の芒の刈残し 芭蕉

穗屋作る人は歸りぬ松の雨 乙二

穗屋とは穗の付きたる芒にて葺たる假立の家を云ふ、七月廿七日信州御射山の神祭に、薄の穗にて御假屋を作ることあり、其假屋を穗屋と云ふに因り、それに用ふるを穗屋の芒と稱するなり

石陣のほとり過ぎけり夏の月 蕪村

孔明の石陣とて、孔明が石を以て八陣を作りしものを云ふ、現今にても孔明が當時の陣地（今は川底となれり）に於て、晴天に水中を窺

へば無数の礎石あり、彷彿の間に八陣の迹を認め得べしと云ふ

薬欄に何れの花を草枕 芭蕉

薬欄とは種々の薬草を植て其めぐりに設けたる罫を云ふ

蝙蝠や川原院のともし影 嘯山

川原院とは、河原左大臣融が京都六條川原に設けし邸宅を云ふ、愚見抄に據れば、六條川原にいみじき家つくりて、池を掘り水を湛え、毎月潮三十石許りを運び入れて、海底の魚介を栖ましめ、又奥州鹽釜の浦をうつして、海士の鹽屋に煙をたて、もてあそばれけるとあり(融は嵯峨帝の皇子にて正二位左大辨の官位たり)

龍塞やみやび心に移さす 青々

龍塞とは漢土と胡地との境に設けし戍寨の名にして、唐の時代には戍卒(番兵)を置いて衛らしめたる所なり

おばしまを女の出づる若葉哉 蕪村

おばしまは、らんかん(欄干)の古語なり

落柿舎の日記に句あり鉢叩 子規

落柿舎や花の流れの一またけ 碧梧桐

落柿舎は京都小倉山のほとりにて、俳人去來の閑居したる庵號なり、其旁近に多くの柿の樹あり、一日商人來りて、立木のまゝに柿の實を購はんとて、若干錢を置きて歸り、翌日復た訪ひ來りし際には、前夜の内に柿多く落ちたるに失望し、豫約の代金を請ひ戻して歸りしことあるに因り、去來戯れに落柿舎の主と稱ふるに至れるよしは落柿舎の記に詳かなり、今は座前に小なる柿の樹唯一本あるのみにて、空しく昔を偲ぶに過ぎず

眼に遠き都の秋や時雨亭 愚村

時雨亭は京都二尊院の後方なる小倉山の半腹に在り、亭の周邊に松多く、其間より遙かに洛中を望むを得べし、定家卿の時雨を聞き亭なりと云ひ傳へり、然るに一説には、是れ後世の附會にして、定家の時雨を聞きしは、定家の小倉山莊としたる厭離庵に於てせしこと確かなりと云へり

花咲て也阿彌左阿彌や講の燭

四 明

多福庵也阿彌、長壽庵左阿彌は、京都圓山公園内に在る旗亭なり、何れも林泉瀟洒にして風流を盡し、詩歌の會、歌舞遊宴の別天地たり

鳴鳴てともし灯消すや長醜亭

子 規

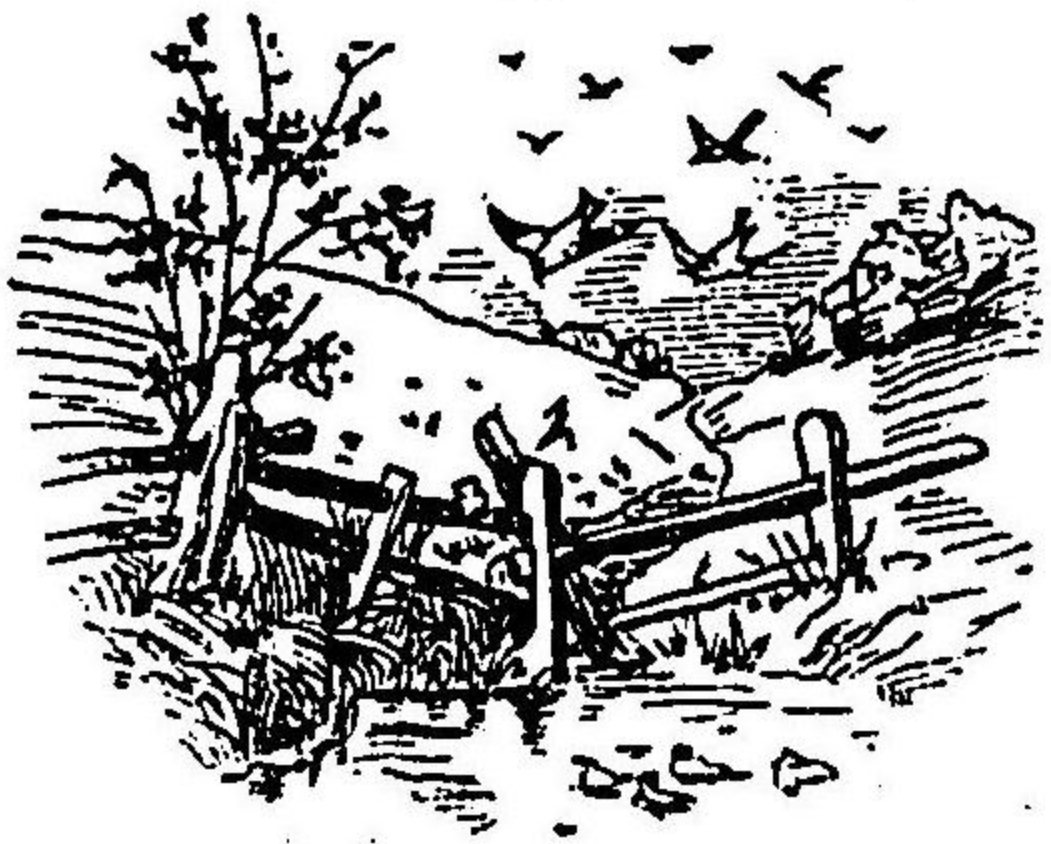
長醜亭は東京上野公園の麓なる不忍池に枕める一旗亭なり、夏は満池の蓮を観るに宜しく、冬は雪を賞するに亦佳なり

三閭廟 秋の七草咲にけり

青 々

三閭廟とは、三閭大夫と稱せし楚の屈原を祀れる廟にて長沙に在り

(屈原を三閭大夫と稱したる所以は第一門第二類支那人士の部に出つ)



第九門

古語雅言

(いろは順)

いとゞしく花に怠る筈哉 召 波

いとゞしは、彌甚の義にて、いよく甚しさを云ふ、源氏に……いとゞしく淋しくよりつかんかたなきまゝ……とあり

更衣いでそよ人を待れけり 吾 石

いでそよとは、いで、いかで、何とての義なり、古歌に……いでそよ人を忘れやはする……とあり

君が手よ末摘む花のいたいけさ 巴 洗

いたいけ(痛氣)は、小兒のいとけなく、かはゆげなるさまを云ふ(俗語)

更衣いわけなき身の田蟲哉 蕪 村

いわけなし(稚)は、いとけなしに同じ、一書に……世の中はいわけなき子のおもきらい……とあり

いまそかりし師の坊に逢ふ枯野哉 几 董

いまそかりは、いませがり(座)に同じ、即ちいませがり(座有)の略にて、いませ、おはすの義なり(古語)

石壇をはらく下りる日傘哉 春 村

はらくとは、氣遣はしく思ふ義にて、ひやくする心地なり

はしたなき女孀の噓や時鳥 蕪 村

はしたなき團扇の音や夜の門 太 祇

はしたなしとは、身分の賤しさを云ふ

はてくは鳥と添寐の木の芽哉 巴 人

はてく(果々)は、はてのはて、末の末、とゞのつまり(終極)の義

なり

菜の花のはつくに咲く都哉

曉 臺

はつくに(端々)と云ふは、僅かに、仄かに、かすかにの義にて、
萬葉に——はつくに人と相見て如何ならん何れの日にか又よそに
見む——とあり

酔しれて蝶のはこする牡丹哉

居 然

はこ(屎)は古語にて糞に同じ

にがくと世話やく蜂の往來哉

嘯 山

にがく(似我々々)は、苦々しき義にて、さらはしき、さもいやら
しき、不快の意なり

門番のはまちの芥子の咲にけり

一 茶

はまちとは、定まりたる賃銀の外のまうけ、即ち私の利得を云ふ

露の臺はうけて人の眺め哉

嵐 雪

秋の野を遊びほうけし芒哉

李 由

ほうけるは、ほうくの俗語にて、ほうくは、ぼくに同じ、俗にぼける
と云ふは是なり、即ち染色などの時過ぎて次第に薄く褪るの義たり

戀猫のほだしも二十日ばかりなり

曉 臺

ほだし(絆)は、馬を繋ぎ留るに用ふる繩の義なり、きづなとも云ふ、
即ち心の物に引かされて身の自由にならぬので、足手まとひのさま
を云ふ

春の夜や我も昔しはとばかりに

定 雅

名月やとばかり起居むづかしき

一 茶

とばかりは、暫しの間、僅のほどと云ふ義なり、古書に——とばかり
ありて此事を云ひ出しければ——とあり

初霜になんとおよるぞ舟の中

其角

一休は何とおよるぞ涅槃像

几董

およるは、御寝即ちおよなる、いぬ(寝)の敬語なり、古書に
舟の中になんとおよるぞ苦を敷寐のかち枕——とあり

おろくくと向へば月の光哉

智月尼

おろくは、うろくの轉訛なり

沙魚釣や鼻おごめきて百とよむ

太祇

をごめく(蠕動)は古語にて、うごめくに同じ、徒然草に——鼻のほ
どをごめきて云ふ——とあり

おごましき蛇や大根の花鳥

夜牛

蠅の血のおごましかりし白團扇

青嵐

おごまし(悍)は古語にて、おすしの義なり

出代や盃させはわるびれる

北人

わるびれるは、わるびるの俗語なり、わるびるとは心後れすること、

臆することを云ふ(古語)、一書に——ずるぶん男子ども、わるびれ
て進み得ず——とあり

笠の緒に柳わがぬる旅出哉

芭蕉

若竹や鞭にわがぬる箱根山

其角

わがぬるは、わがぬ(縮)の俗語なり、物を撓め曲げて輪の如くにす
るを云ふ

わびしらに貝吹く僧や閑子鳥

其角

わびしらには、古語にてわびしげにの義なり、古歌に——秋の虫な
にわびしらに聲のする——とあり

氷伐る人かしがまし朝嵐

子規

かしがまは、かまびすしの俗語にて喧噪の義なり

かしまだちとは寝過さす起て時鳥 落、峰
かしまだちとは旅立ちのことを云ふ

山の道も長閑さうなりかぢ枕 道彦
かぢまくら(楫枕)とは、船中に宿泊することにて、即ちふなやどりを云ふ、陸の旅路を草枕と云に同じ

虫賣のかごとかましき朝寐哉 蕪村

かごとは、かこち言、かこつけの意なり、故にかごとかましとは、かごとを云ふさまなり、源氏に——かごとかましき虫の聲かな——とあり

葱坊主大根の花にかくろひぬ 雁門
かくろふは、隠るゝの義には古語なり、伊勢に——昨日今日雲のた

ちまひかくろふは——とあり

薺打つ里を見るかに歸る雁 青蘿

かには、動詞につきて副詞とする接尾語なり、即ち……のやうに……ばかり……などの意に用ゆ

からしりの蒲團ばかりや冬の旅 暮年

からしり(穴尻)とは、昔し馬の荷物を半分ほど頸の方に積んで、其臀の方に人を乗せる様にしたので、尻の方に荷物が無く空(から)であるゆるしく稱するに至りしならんか

入道のよゝとまゐりぬ納豆汁 蕪村

よゝとは、涎の流るゝさまを云ふ、古書に——雫もよゝと喰ひぬらし玉へば——とあり

待つことは梅にあるかも茶摺子木 丈草

もろこしは裏を見るかも雲の峰
柳居
かもは、疑問のかと感嘆のものとの合成語にて、疑ひながら感嘆の意を示す辭なり

此水にかね言多き糸瓜哉
斗衡

かねごと(兼言)は、兼て云ひ置きたる言、約束の言、又は豫言、前
言の義なり

よすがにいと植給ふ檜茂りけり
句佛

よすがは、ゆかり(因)たより(便)よるべ(縁)よすか(寄處)などの義なり

冬木立いかめし山のたすまひ
其角

たすまひとは、佇むの意にて又は立ちたるさまをも云ふ

たどくし峰に下駄はく五月闇
探志

たどくし(辿辿)はおぼつかなし又さたがならぬの意あり、萬葉に

夕暗は途たどくし月待て

いざたまへ冢名月と興すへき
麥水

たまふは、賜ふ、與ふの意なれど、飲食の意にも用ゆ

稻葉殿の御茶たぶ夜や時鳥
蕪村

たぶは、食と賜との兩様の意あり、俗語のたべると云ふは、たぶの轉訛なり

帷子に風のそばゆる舟の上
乙二

そばゆ(戯)は、たはふれさわぐ、即ちそばつくことなり、俗にそばえるとも云ふ

雁立てそよや田螺の戸を閉る
蕪村

そよや(驚破)は、そよと云ふに同じく、即ち事に觸れ思ひ出で、發

する語にて、それよと云ふことなり

夜鳥をそやし立てたり鳴の群 丈草

そやすは、喚び起す、おだてる、そゝのかすの義なり

つがもない國へ渡りぬ舟の蠅 杜支

つがもなしとは、縁もなし、わけもなしの義にて、俗につがもないと云ふは是なり

つけさしの穂に出る君や今年酒 召波

つけさし(付差)は、返盃するとき更に別の盃を添えて其人にさすのを云ふ(俗語)

枯草につやく垂る、柳哉 吳川

つやくとは、光澤のあるさま、即ちつやくかにの義なり

涼しさを我宿にして寝まるなり 芭蕉

寝まるとは、寝る、つくばふ、うづくまるの義にて、北陸道邊の方言なりと云ふ

春風や草に寝そべる孕み馬 六花

寝そべるは、寝そびれるの義にて、寝て眠り得ず、即ち寝そこなふなり、又寝そびれるとも云ふ

臘八や和尚漸くねびまさり 雁宕

ねびまさるは、老成の義にして、ねびひとは老成人と云ふに同じ

竹の子やあまりてなどか人の庭 大江丸

などは、外にもまだ有るの義にして、何故か、何とてかと、稍々疑へる意なり、古歌に——浮世には門させりとも見えなくなどか我身のいでがてにする——とあり

盃に泥な落しそ 燕 芭蕉

窓の灯を山へな見せそ鹿の聲

蕪村

な取りその二ツ三ツ四ツ早梅花

惟然

な折りそと折てくれけり梅の花

太祇

寝くゝるや鳴きそな鳴きそきりぐす

曉臺

磯菜摘みし日をな思ひそ若布刈

風齋

なは、動作を禁ずる語にして、詞の上と下に用ふる二様の場合あり、

詞の上になを用ふるときは、其文字と併せ用ゆ、即ち前の例句に示

しゝ如く、な落しそ、な思ひそと云ふの類なり

百合寒し水戀ふ鳥の啼くなべに

道彦

なへ(並)は、それにつけて、それに伴ひての義なり、古歌に||か

りがねを聞つるなへにたかまどの||とあり

荅とはなれもしらすよ路の臺

蕪村

なれとは、古語にて汝の義なり

子子やなまなか澄める腐れ水

太祇

なまなかに掻き残されて昔の花

蝶夢

なまなかにとは、半途に、未熟に、不十分にと云ふ意なり

らふたけに巢籠る孕み雀哉

菊男

らふたし(隣)は、かはゆらし、愛らし、したはしの義なり(古語)

むくと起て雉追ふ犬や寶寺

蕪村

むく起つ峰の紅葉の朝しめり

李由

むくとは、俄に起き上がるさまを云ふ、むく起きは、むくとを略し

たるなり

むつくと匂ふてもなし桃の花

木因

むつは、睦しき意を示すに用ふる語なり

うつゝなきつまみ心の胡蝶哉 蕪村
うつゝなく草食ふ猫の思ひ哉 尙白
晝の鶉のうつゝに啼くか籠の中 青蘿
うつゝは、顯なり、現なり、眠のさめて居るを云ふ、即ち平生の狀
態なり、うつゝない其反對にて、まぼろしきなり、女にうつゝをぬ
かすと云ふの類是なり

秋萩のうつろひて風人を吹く 樽良
うつろふは、移ること、變ることなり、萬葉に——天の川去年の渡
りのうつろへば——とあり

出代や世をうたかたの飯の泡 白雄
うたかたは、泡沫の意にして、はかなきことに例へて云ふなり
うらくと石に煙りや鶯の聲 徐丹

うらくとは、うらくかに、のどかにの義なり

遅しき葉のさまうたて桐の花 召波
うたてとは、餘りに甚しく、平穩ならず、世の常ならずと云ふ義なり
日や暮るゝ尾をうちかひて枝の雉 白雄
うちかひては、うちちがひ(打違)に同じ、古歌に——和泉川下る小
舟のうちかひて——とあり

いねかしの男うれたき砧哉 召波
うれたしとは、憂甚し(うれいたし)の義にて、うれはし、なげがは
しの類是なり

鎌倉の街道をのす燕哉 尙白
のすは、乗せる、乗らしむるの義なり、又は伸ばすの義もあり
一と時雨又くつをるゝ日影哉 露沾

くつをるは、くづれをるの義にて、ひるむ、臆する、氣拔けするの類なり(古語)、源氏物語に——吾れ亡くなりぬとて口をしう思ひくづをるな——となり

飛ひかはすやたけ心や親雀 燕 村
余所心やたけにはやる角力哉 士 喬
やたけ心とは、いやたけき心(彌猛心)の義にして、いよく勇みはやるを云ふ

芦の穂や蟹をやらひて折れもせず 丈 草
やらひとは、追ふ、追ひ放つの義にて、鬼やらひ、神やらひなど云ふの類是なり

山つとの紅葉投げり上り口 召 波
山つと(山苞)は、やまのみやげなり、源氏に——山つともたせた

まへりし紅葉——とあり

山梔子の花ましくと咲にけり 浮 石
まじくとは、耻ぢらふるさまなり

まさくと我に月さす枯野哉 五 明
鶯や晝まさくと竹の月 北 遠

まさくは、正々(まさく)の訛か、又は眼前(まさか)の略か、何れにしても眼前憚ることなきを云ふ、即ちむざくとの意なり

芭蕉葉を敷てまる寝や風涼し 水 巴
まる寝は、丸寝と云ふに同じ

まだきとも散しとも見ゆれ山櫻 燕 村
まだき日に北の窓さす主哉 佳 七

まだき(豫)は、時に先ちての義にて、即ちいまだしきの古語なり、

古歌に || まだき吹ぬる秋の風かな || とあり

小萩散れますすほの小貝小盃 芭蕉

炭俵ますほの芒見つけたり 蕪村

選りわけん眞蘇枋の小貝海苔の屑 几董

ますほ(眞赭)は、赤き色と云ふ古語にて、ますほの芒とは赤き色の芒と云ふ義なり、又ますほを、まろほとも云ふ、几董の句に眞蘇枋とある是なり

暮の眼をまじろがりけり夏衣 ノ 旦

まじろく(眩)は、またく、目をしばたく、即ち目ばたきすることなり

入日さすほとりけうとき花の陰 道 立

けうときは鶯の栖や雲の峰 祐 甫

けうとき又けうとしは、うとまし(疎)の義に同じ、又恐ろし、驚くべし、愚かなりの義にも用ゆ(古語)、某書に || これはけうとき事を仰せられ候ものかな || とあり

腹の中へ齒は投げけらし種瓢 蕪 村

けらしとは、過去助動詞のけりの變化けると、想像助動詞のらしと合併して約まりたる語なり、古歌に || 櫻花咲きにけらしな足引の || とあり

鍋蓋のけばくしさよ年の暮 孤 屋

けばくしとは、けばくしになると云ふ意にて、けば立つことなり、即ち紙などのもまれて毛たつを云ふ(俗語)

人心いくたび河豚を洗ひけん 太 祇

けん(けむ)は、過去を推し量りて未來に云ふ助動詞なり、行きけん、

落ちけんと言ふの類亦然り

ふくよかになりし日南の蒲團哉

麥 人

ふくよかには、ふくらかに(脹)の古語にてふつくりとしたる義なり

こもりくの蜂にさゝれな糸櫻

几 董

こもりくは、こもりき(籠り城)の義にて墓所のことを云ふ或は又隱

國(こもりく)の義として隠れくもりたる地方をも云ふ

種茄子こや色よきがなれる果

佛 外

こやは、古語にて、これや(此)の義なり

永き日や雀の親のあがくこと

尙 白

あがくとは、烈しく動くこと、即ち手足などをやたらにはたらかすを云ふ

あなかまと鳥の巢見せぬ庵主哉

太 祇

待つ日には来てあなかまの蜺賣

几 董

あなかま(嗟喧)とは、ああかしまし、ああさがしの意なり(古語)

仰向に寝て青丹よし奈良團扇

一 茶

あをによし(青丹吉)に就ては種々の説あれど、青丹は青き土にて、

家を建つる時に築きならすことあるより、なら^ろにかけて此語を用ゆ、

古歌に||あをによしならの都は咲く花の||とあるの類なり

ありわびて酒の稽古や秋の暮

太 祇

ありわぶ(在詠)は、ながらへがたく思ふ、ありにくく思ふの義なり、

伊勢に||京にありわびて||とあり

あなうく射よげに見ゆる萩の鹿

曉 臺

あなうは、嗟憂の意にして、ものうきことかなの古語なり、あなう

とや云はむ、あはれとや云はむの類是なり

あらげなや祭の中のつるめそふ

涼 菟

あらけなしとは、あらくしきこと(暴)を云ふ、平家に||もの、ふのあらけなきに捕はれて||とあり

白骨のあなめくや枯芒

麥 水

あなめは、あな(嗟)の義にて嗟嘆の古語なり、あなめくとは嗟あなを重ね云ひたるなり、古歌に||秋風の吹くに付けてもあなめくをのとは云はじ芒老いけり||とあり

されありく主よ下人よ花衣

其 角

されは、戯れの古語にて、ありくはあるく(歩行)の古語なり

初雪や誰かさかしらの竹箒

保 吉

さかしらは、利口ぶること、即ち物知り顔に振舞ふを云ふ

めらくと煙かゝるや露の上

乙 二

朝寒やめらく燃る黍の稈

極 堂

めらくは、火のたやすく燃るさまを云ふ、竹取に||火の中にうちくべて焼かせ玉ふにめらくと焼けにしかば||とあり

めたくと日暮かちなり柞原

成 美

めたとは、めつた(滅多)に、やたらに、むやみにの俗語なり

めかしさよ夏書をしのぶ後向

太 祇

めかしとは、何々の如きさまと云ふことなり、めきて見ゆなどの意に用ふる語なり

したゝるき雨の雫や花柘榴

重 厚

したゝるきとは、物言ひのでれくとしてをる意なり

盛遠かしやつ面たゝく霰哉

一 茶

しやつつらとは、他人の顔を罵りて云ふ詞なり(俗語)

藻を刈るや晝もしば鳴く時鳥 乙 二

しばなくとは、屢々鳴くこと、古歌に——川の瀬ことに千鳥しばなく——とあり

笋の時より老るし弓の竹 去 來

老るしとは、きはだちてあり、即ち明白である義なり

行水の日ませになりぬ虫の聲 尙 白

ひませは一日置き(隔日)の古語なり

行水の底ひぞりたる盥哉 曉之成

ひぞりは、乾て反りかへる義なり

鳴立て秋天ひき、思ひ哉 蕪 村

ひきしとは、低しの古語にて、ひき、は即ち低きなり

百合の花ひたものあちら向きたがる 支 考

ひたと犬の啼く町越えて踊哉 蕪 村

ひた降や夜は夜もすから五月雨 萬 橋

ひた(直)は、ひたすら、うちつけ、たゞちの義なり

春雨やあらしも果す戸のひすみ 嵐 蘭

ひすみ(不正)は、ゆがむ、まがる、いびつなる義なり

ものはかな鵜舟過ぎゆく跡の闇 蝶 夢

ものはかなは、物果無の義にて、物ごと何となくはかなき意なり

せたらおふ豆こばれゆく夏野哉 成 美

せたらおふは、背撓負の義にて、背を曲げて物を負ふことなり

竹の子や稚き時の繪のすさび 芭 蕉

花苔に塔つむ蟻のすさみ哉 旨 原

すさびとは、古語にてなぐさみ、遊びごとの義なり

若禰宜かすがくしさよ夏神樂

蕪村

すがくし(清々)は、さつぱりしたること、さはやかなる義なり

風に入相の鐘をすゞしめよ

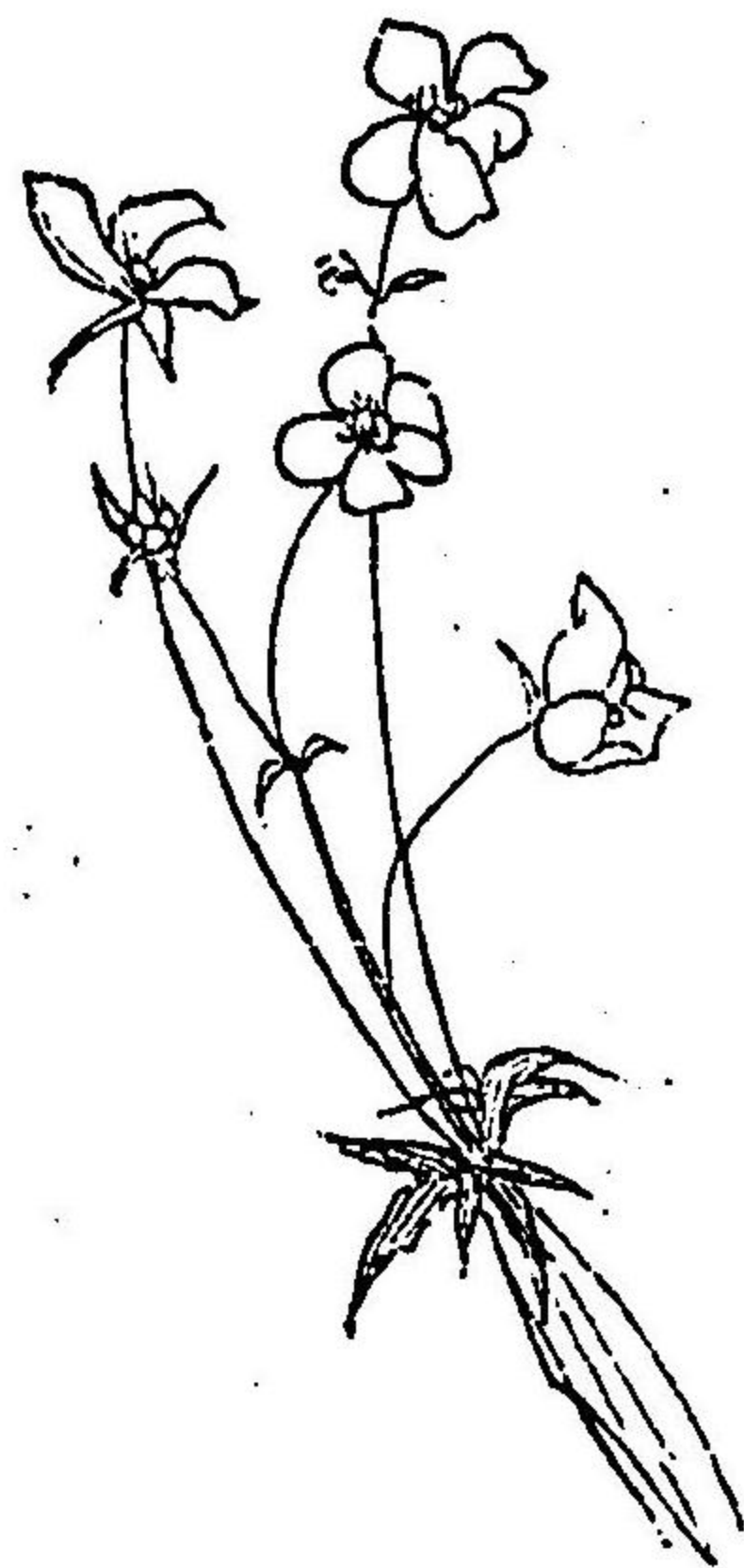
凡兆

すゞしむとは、神慮を清め鎮むるなり

鶏頭やすかとは佛に奉る

太祇

すかとは、うちつけに、ちぎに、そのまゝにとの義なり(俗語)



第十門

漢語故事

桑の實や兒にまゐらす李氏の環

几董

李氏の環とは晋の羊祐が故事なり、羊祐五歳の時、乳母をして金環を求めしむ、乳母曰く御身は未だ嘗て之を有せしこと無し、今俄に之を求むるは何ぞやと、羊祐さらばとて隣家の李氏の桑園中に詣り、金環を探り得て来る、李氏驚て曰く、是れ吾が亡兒の失ひし物なり、何故に携へ去るぞと、乳母具さに前の事由を語りしかば、李氏もそぞろに悲惋の情を催せりと、蓋し李氏の兒は羊祐の前身なりとの意なり

帷子や損者三友交はらず

碧梧桐

孔子曰友_{トシ}直友_{トシ}諒友_{トスルハ}多聞_ヲ益矣友_{トシ}便辟_ヲ友_{トシ}善柔_ヲ友_{トスルハ}便佞_ヲ損矣(論

語)とあり、前者を益者三友と云ひ、後者を損者三友と云ふ

長閑や鶴九臯に舞ひ上る 叟柳

詩經に、鶴鳴_ニ于九臯_一聲聞_レ于天_一とあり、臯は沼淤の義にして、九とは野より數へて九に當ると云ふ意なるがゆる、野外の野と云ふこと、即ち甚しき幽遠の義なり

爐塞て南阮の風呂に入身哉 蕪村

南阮は北阮に對する稱にて、昔し支那に阮と云へる一族あり、一方は道南に居り他は道北に在りしが、北阮は富みて南阮は貧なりし故に、南阮とは貧士の義として用ゆ

騅不逝騅不逝兮四方餅の音 旨原

騅は項羽の愛馬の名にして、項羽終に沛公(漢の高祖)の爲に敗られ、垓下に戦死するとき、寵妃の虞姬と別るゝに際し、騅不_レ逝騅不_レ逝

兮、虞兮虞兮汝を奈何せんとして嗟嘆し云々とあり

虎の尾を踏みつゝ裙に蒲團哉 蕪村

履_ニ虎尾_一と云へる語は易經の中に見ゆるので、危険の意を寓する詞なり、即ち恐るゝにて不安の義なり、即ち易經に——履_ニ虎尾_一不_レ蛭_ハ人_ヲ亨——とあり、虎の尾を踏みて噛かまれざるは、宛も危険を冒して害に遭はざるが如く、能く運命強しとの意なり、又書經にも——心之憂危_{スル}若_シ踏_シ虎尾_一涉_ル于春冰_一——とあり、何れも同義なり

三徑の十歩に盡きて蓼の花 蕪村

三徑は前漢の蔣詡と云ふ人が、其庭に設けたるものにて、始めは三筋の小路ありしをもて三徑と稱せしも、後世には必しも其徑の數に拘はらず、唯閑逸の園庭を稱するやうになれり

麥蒔の煙煙長き夕日哉 蕪村

罔兩の襟かき合す夜寒哉

魚官

魍魎は一に罔兩とも書す、左傳の宣公三年に——魍魎罔兩莫能逢之——とありて、其註に魍は山神獸の形にて、魎は怪物、罔兩は水神を云ふとあり、又一書には、木石の怪を魍魎といふ、好んで人の聲に倣ひ、人を惑ひ迷はしむとあり、要するに山川の靈怪なる義なれど、句意によりては單に影法師と解する方が穩當なり

苴の葉や朝三暮四の汁となり

米夫

朝三暮四の故事は列子に出づ、曰く宋に狙公なる者あり、狙を愛し能く其意を解す、狙も亦公の意を得たり、狙公の家漸く貧にして食に乏し、因て狙に與ふる所の食料を節減せんとす、然れども衆狙の己れに馴れざるを恐る、先づ之を誑きて曰く、汝に茅(クリ)を與へん、朝三にして暮四にせば足らんやと、衆狙皆怒る、狙公更に曰く、

然らば朝四にして暮三にせば如何と、衆狙舉な喜ぶ云々とあり、是れ狙公智を以て甘く衆狙の愚を籠絡し、己れに損する所なく、表面を變へて其實を改めざるなり、故に朝三暮四とは愚弄の義なり

骨鯁のこれある春と祝ひけり

未央

鯁の字は魚骨の咽喉に横はるの義にして、直言の受け難きこと、宛も骨の喉に障るが如きを云ふ、史記刺客傳に、内空無骨鯁之臣——とあるは便佞薄志の徒多くして、侃々諤々、白刃を踐て怖れざる的の忠烈鐵腸の臣なきを云ふなり

警咳に接せずと書す冬籠

寒山

師の翁の警咳に接す接木哉

白山

警咳は言笑の義、又シハブキの意にして、人に接するを警咳に接すと云ふ、是れ畢竟直接に其人に接すと云ふを避けたる所以にして即

ち敬意に出づ、列子に宋唐王蹠^{トク}足^{ソク}聾^{ソウ}咳^カ疾^{シツ}言^{ゴン}とあり、莊子には况^{キヤウ}乎^フ昆^{コン}弟親戚之^{テイシンセキノ}聾^{ソウ}咳^カ其側^{キソバ}とあり

青眼 高歌 世上を見れば年の暮 橡面坊

晋の阮籍と云へるは能く青白眼を爲せり、即ち禮法の士を見れば白眼を以て之を待つこと常なり、母の死せし時、友人の恭しく來り吊するには、阮籍之を待つに白眼を以てし、琴を抱き酒を齎らし來る者には阮籍大に喜びて青眼を見はせりと云ふ、即ち白眼とは人を睥睨する意にして、青眼とは款待するを云ふなり

連衡を説く 蠶虫一ツ哉 撲天鵬

連衡と合従とは支那戰國時代に行はれたる政策にして、連衡は張儀之を説き、合従は蘇秦之を説けり、前者は戰時の六國を分離せしめて秦に就かしめんとするので、秦の爲にするもの、後者は六國を合同

せしめて秦に當らんとするので、六國の爲に計劃したる方略なり

唐門の迦陵嚩伽に遊絲哉 師竹

迦陵嚩伽とは、佛經に所謂極樂に栖める不死の鳥の名として假説したる者にて、其面は美女の如く其聲最も美なりとあり、故に妙聲鳥、妙音鳥など、譯したるも見ゆ

蝸牛廬に我れ舌耕の頭巾哉 青嵐

漢の賈逵なる者、博く經書に通じ、門弟の來り學ぶ者多く、擧な穀物を獻じて倉に盈みしかば、時人之を見て賈逵は力耕するに非ずして、乃ち舌耕するなりと云へり、故に學問を講じて食を足す者、即舌を以て農夫の耕すに代ふるに比喻して斯く云ふ

累々と徳孤ならずの蜜柑哉 漱石

論語に——徳不^{ナラ}孤^リ必有^リ鄰——と見ゆ、蓋し徳ある者には必ず其類

ありて之に従ふこと、宛も誰しもの家居に必ず隣あるが如しとの意にして、有徳者は孤立せず相應する者あるを云ふなり

齒固や耳順の父母に十二孫 素 泉

耳順とは年齢の六十歳なるを云ふ、論語に——六十而耳順——とあり

三ヶ日もホ句三昧や貧にこそ 烏 堂

永き日や君俳三昧我寢三昧 水 巴

三昧とは妙處を云ひ又は專念を云ふ、書言故事に曰く、大凡物皆有_二三昧_一謂_二其妙處_一也とあり、遠法師曰く、夫れ三昧とは思を専らにし、想を寂にするの謂なり——とあり、釋氏の三昧と云ふは儒家の致一と云ふに其義相同じ

釋典や鄒魯の學を治くす 櫻 碗子

鄒魯の學とは孔孟の學と云ふに同じ、即ち孔子は魯の人にて、孟子は鄒の人たりしなり

漱枕居春水眉宇に迫るなり 聾 兔

漱枕居とは、隱遁閑居の場合を云ふ、是れ漱_キ石枕_ス流_ニの語を略したるに基けるなり、昔し支那に孫楚と云へる文人あり、才藻衆に秀づ、嘗て閑地に隱遁せんと欲して、友人の王濟に對ひ、當さに枕_シ石_ニ漱_ク流_ト云ふべきを、誤りて漱_キ石枕_ス流_トと云へり、王濟曰く、流れは枕すべきに非ず、石は漱く可らずと、孫楚忽ち答へて、流に枕するは耳を洗はんが爲め、石に漱くは齒を礪かんと欲すと云ひしかば、此の當意即妙の答を稱して、後世には其の誤りたる儘の語を用ふるに至りしなり

祝融氏屢々到る師走哉 丁 川

祝融とは火災を云ふ、相傳ふ、顓頊氏の子死して火神となる、故に火災を指して祝融の災と云ふに至れり

一瓢の飲で寝よやれ鉢叩 燕村

一瓢の飲とは、孔子が其高弟たる顔回の賢を稱賛したる時の語なり
論語に——子曰賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也——とあるに基く

支那の、人簞食の禮や夏柳 露月

簞食とは前に記したる一簞食より出でたる語にして、簞は竹器なり、食するに金玉の器を以てせず、竹器に盛りて安んずるの意に外ならず、即ち清貧の境遇を形容したる語なり

乾かざる一抔の土や冬木立 几 雕

抔の字は手にて物を掬ふ義なるゆる、一抔土とは量の少きを云ふ、

然るに漢書に——愚民取長陵一抔土陛下將何以加其刑乎——とあり、又駱賓王の詩に——一抔土未乾六尺孤安在——とあるに因りて、一抔土と云へば陵墓の義として解するに至れり

俳諧の壺中の天や冬籠 田鶴來

壺中の天とは、仙人の栖處を云ふ、列仙傳に漢の長房なる者、汝南市の吏となる、其市に老翁あり、市中に壺を懸けて出入す、長房之を樓上より望見し、一日其翁に従ひて壺中に入れば、宮殿樓閣皆具はれりとあり

諒闇に竹の秋風荒みけり 天易兒

諒闇とは天子の喪を云ふ、古書に——王宅憂亮陰——とありて亮陰は諒闇に同じと云へり、又高宗諒闇三年とあり

竹植て騷人の鬚眉緑りなり 師 竹

騷人とは詩人を云ふ、昔し楚の屈原貶せられて悵悶に耐えず、其愁を叙する爲に、離騷の賦を作りしが、文詞極めて巧妙なりしゆゑ、詩人を指して騷人と云ふに至れり、又一説に、詩人は能く憂を云ふがゆゑなりとも見ゆ、蓋し玉篇に騷は愁なりとあり

玉山の頹るゝや鶉舟遙なり 小 酒

玉山の頹るとは、人の酒に酔へるさまを云ふ、晋の叔夜なる者風采秀で、且奇才あり、世説に——叔夜之爲人^{リト}崑々若^{トシテシ}孤松之獨立^{スルガ}——其醉也^{フヤ}傀俄若^{トシテシ}玉山之將^{スルガ}頹^{レント}——とあり、是よりして人の酔倒するを玉山頹ると云ふに至れり

公主陵 返り花 咲く桃李哉 江 流

公主とは支那の天子の女を云ふ、故に公主陵は天子の女を葬りし墓所なり、蓋し天子の女を諸侯に嫁するとき、天子自ら婚儀を主らす

して、必ず同姓の者をして主らしむ、之を公主と云ふ

篋鳴や俎豆つらぬる遊び事 露 月

俎豆とは、支那にて祭事に用ゆる器具の名なり、即ち俎は机の形にして木にて作り、豆も亦木製にして、俎には肉類を盛り、豆には菜醢類を盛りしとぞ

雁をうつつ羽林の騎士が暇哉 橡面坊

羽林は支那の制度にて天子の宿衛を掌る役なり、蓋し唐にて天子の旗本の居る所を羽林軍と云ひ、其士を羽林郎と云ひ、諸國より良家の子を撰抜して之に任じたるがゆゑ、其意氣の揚々たる亦想ふべし

はかり炭箕箒を奉す四十年 青 嵐

箕箒は洒掃の具なるにより、妻としての謙遜の詞に用ゆ、史記に單父の呂公なる人、漢の高祖に謂て曰く——臣有^ニ息女^ニ願^{クハ}爲^ニ箕箒妾^ト——

云々とあり

筭に巫山の雨を迎へけり 青々

支那の峽州に三峽あり、明月峽、巫山峽、廣澤峽是なり、其山水何れも險秀なり、而して巫山の雲雨と云ふは、楚の襄王が嘗て其地に遊び、神女と會せし故事に因る、即ち楚王が大夫宋玉を伴ひて襄唐に遊びし時、夢に一婦人を見る、曰く妾は巫山の女なり、今高唐に客たり、君亦高唐に遊ぶ、願くは枕席を薦めんと、王因て之を寵す、婦人去るに臨みて曰く、妾は巫山の陽、高丘の岨にあり、旦には朝雲となり、暮には行雨となる、朝々暮々、陽臺の下に於てすと、王朝夕之を見れば果して其言の如し、故に廟を立て、朝雲と號したりと云へり

缺舌の夫婦若しや更衣 青々

缺の字は博勞鳥(モズ)に同じきがゆるゑ、缺舌とは博勞鳥のやかましく鳴き叫ぶ如く、更に其意の解し難きを云ふ、孟子に——南蠻缺舌之人——とあるは、外國人の何を喋ることぞと稍々卑みて云へるなれど、或は又口やかましき人物を指し又は辯口讒佞の人にも譬ふることあり、同書に——反舌(缺舌のこと)有聲、讒人在側——の類是なり、但此句に謂へるは孟子の義に據れるならん

青梅や捧心の人垣を間つ 蕪村

捧心とは、支那の美人西施に關する故事なり、即ち西施が少しく病みて、胸をおさへたるを形容し、心を捧ぐと云ひたるに因る

燒芋に吳下十年の阿蒙哉 珀雲

阿は敬語にて阿爺と云ひ阿兄と云ふに同じ、吳下の阿蒙とは、魯肅が呂蒙を評したる語にて——汝は吳下に在りし時の如き平凡にあら

す智識上達せり——と云ひしに基く

寶萊の山祭りせん老の春

蕪村

漢土の帝王たちが天子の位を履み意氣最も盛んなる時、山を祭ると云ふことあり、即ち秦の始皇や漢の武帝などが、泰山に封じたる如き是れ山を祭りしものなり

斧の柄の朽ちん心地す初曆

道彦

昔し支那晋の世に王質と云へる人、伐木の爲山に入りしが、偶ま仙人の碁を圍めるを見てありし間に、傍に置たる斧の柄のはや朽ちて幾年月経たりとも知れず、急ぎ故郷に歸りしが、家も人も昔しの俤なかりしとの故事あり

帛を裂く琵琶の流や秋の暮

蕪村

帛を裂くとは、白樂天の琵琶行に四絃一聲如裂帛とありて、元來は

琴聲の形容なるを、此句には水聲に轉用せしなり

百八のかねて迷ひや闇の梅

其角

百八とは、佛説に所謂百八の煩惱のことにて、それを覺ます爲に百八ほどの鐘の數を撞くと云ふ事あり

畑打や法三章の札の下

蕪村

漢の高祖が秦を討ちて關中に入りし時、秦の制度の煩雜なるを解き、父老に約するに唯僅に法三章を以てし、民大に安堵せしと云へり、其三章とは殺人者死、傷人及盜抵罪との三ヶ條なり

あだなりと花に五戒の櫻哉

其角

五戒は佛教の語にして、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の戒を云ふ

牡蠣二俵中に趙氏の玉がある

青々

支那戰國の世に趙王が卞和の璧と云へる名玉を得たり、秦の昭王之

を聞て十五都城を以て交換したしと云ひ越し、により、趙の宰相たる藺相如が其玉を携へ往きしに、秦王が珠のみを取て十五城を譲るの色見えざりしかば、相如は身命を犠牲に供するの一大決心を以て、其玉を奪ひ歸りたるいと雄邁壯烈の事績あり(史記に詳なり)

枕頭に卞和の璧や春の夜半

青嵐

楚人卞和なる者、玉璞(アママシ)を得て國王に獻ず、王、玉人を召して之を相せしむ、曰く是れ石なりと、王其欺きたるを怒り、卞和の左足を刖(ケツル)る、後ち太子の王位を嗣ぐに及び、復た之を獻ず、王、玉人をして相せしむ、又曰く石なりと、王其欺きたるを憤り、卞和の右足を刖る、和氏玉を抱いて泣哭すること三日夜、涙盡きて血之に繼ぐ、王其故を問はしむ、和答へて曰く、我は吾が刖られしを悲むにあらず、寶玉を石なりとし、忠貞の士を詐欺の徒なりと誣

ゆ、是れ之を悲むなりと、王更に玉人をして其璞を磨かしたるに果して名玉を得たり、之を和氏の璧と云ふ、前に記せる如く秦王が十五城を以て代へんと望みしは即ち是なり、唐詩に——趙氏連城壁由來天下傳——とあるも亦之を云ふ

河豚汁や五侯の家の戻り足

蕪村

屠蘇の酔五侯の門に候しけり

鶴聲

五侯とは榮華を極めたる五人の權官を云ふ、即ち後漢の桓帝が、當時の官宦たりし單超其他四人を封じて、同日に縣侯に進めしを以て之を五侯と云ふ、又一説には、漢の成帝の母舅たる者、五人同日に侯に進められたるが即ち五侯にして、孰れも贅澤を極め、競ひて奇膳を致し、就中五侯鯖と稱するもの、最も美味なりしとあり、(鯖とは魚を煮、肉を煎りて調和せしものを云ふ)

野梅咲て輓歌聞えすなりにけり 几 董

輓歌とは、柩を挽く者の歌ふて悲みを表はす歌を云ふ、前漢の田横戦ひ敗れて自殺せしに、従者敢て哭せざるも、其實は哀しみに耐えず、悲歌を作りて哀悼の情を寄し、ことあり、是れ輓歌の濫觴なりとぞ

爐塞や招隱の詩を口すさむ 召 波

招隱の亭主か柿を吊しけり 虚 明

招隱の詩とは塵世を避けて山中に隠棲するを勸むる詩なり（文選に左太冲が招隱の詩あり）

若布刈竹枝の言葉習ひけり 召 波

竹枝とは流行り歌を詩に直したるものなり、初め唐の劉錫、俚歌の鄙陋なるを厭ひ、竹枝新詞を作り里中の兒女をして歌はしむ、蠻俗

之が爲に一新せりと云ふ、蓋し之を竹枝と云ふは、其當時竹頭に詩を書きたる紙片を吊るし、行く／＼之を謠はしめしに因る

嚶々と鳥も啼くなり夏木立 曉 臺

嚶々とは兩つの鳥が互に相應して啼くさまを云ふので、詩經に

鳥鳴嚶々——とあるに因る

蓁々たる桃の若葉や君娶る 子 規

蓁々とは茂れる貌にて、詩經に——桃之夭々其葉蓁々——とあり

堤一里依々戀々と柳哉 子 規

秀才に校門の柳依々如たり 碧 梧桐

依々は茂れる貌、又は柔弱なる容にも用ゆ、詩經に——楊柳依依——とあるの類なり、又李陵が蘇武に答ふる書中に——能不依々——とあるは、愁思に耐え難からんとの意にして、依々の語は種々

に適用さるゝなり

稗詩の離々として噫鶴病めり 紅葉

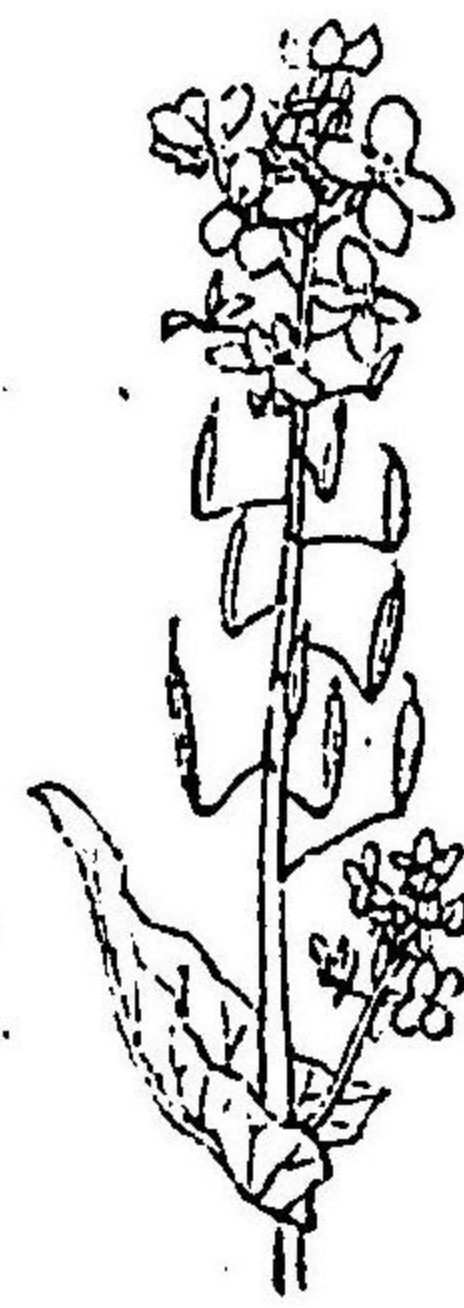
離々とは親しまざる貌、又遠ざかる義にして、笥子に離々然とあり

楚々として竹に風ある蚊遣哉 飛矢郎

楚々とは茂れる貌又相並ぶ容にも用ゆ

亭々たる夏の木立や仰くへし 一堂

亭々とは聳え立てる貌、即ち高ささまなり、高山磐石其上亭々
とあるの類なり



第十門 雜部

第一類 天文、時令

雉子鳴やこゝいなめのめの朝日山 燕村

いなめは、黎明の義にして、夜の明け方、しのゝめ、あけぼのなど
云ふに同じ

明星や櫻さためぬ山かつら 其角

草の葉の霜より明けて山かつら 几董

霧の香や松明捨る山かつら 白雄

山かつらとは、曉の横雲の山にかゝりて居るのを云ふ

黒ばえや押かゝりたる木々の闇 秀峨

白ばえや佛の花を捨に出る 碓嶺

黒ばえ白ばえは、孰れも梅雨中の空合を云ふ、即ち今にも降らんとする空模様が、少しく明るくなるを黒ばえと云ひ、小雨降りながら霽れもやせんとする空模様の見ゆるを、白ばえと云ふ、蓋し暮れかかる空合の一しきり晴れて明るくなるを、夕榮えと云ふの類なり

鄙曇 必ずよ 山時鳥 白雄

時鳥 南下りにひな曇 曉臺

ひなくもり(鄙曇)は、日の曇りの義にして、曇りたる日影は、光の薄きにより或はうすひにかけて云ふことあり

春雨 やいざよふ月の海半 蕪村

いざよふとは、滞りて進まず、たちやすらふの義にして、いざよふ月とは月のでしほの悠然たる趣を云ふなり、源氏に||いざよふ月にゆくりなく||などあり

月代 や時雨の中の虫の聲 丈艸

月代 やさゝ波立て、鳴く蛙 蓼太

月代は月白なり、即ち月の升らんとして空の白む時を云ふ

時津風 船にのどけき和田の原 鬼貫

時津風とは、潮時に従ひて吹く風の義、即ち吹く時の定まれるを云ふ

汗拭 小松にかけて沖津風 嵐雪

沖津風は海の沖を吹く風のことなり

羅を曳くや天女の天津風 鳴雪

名月や雲雀舞ふさへ天津空 太溪

天津風とはそらを吹く風、即ち天上の風を云ふ、天津空も亦之と同じく天上の義に外ならず

栗の口を休む小店や海羸廻し 松濱
栗の日とは九月九日を云ふ、此日は世俗に栗飯を焚きて祝ふゆゑ、
栗の節句とも云ふ

【第二種】 衣食、調度、食器類

褻形ては逢はし云ふても花の春 去來
褻形は、けなりと訓み、ふだんぎ(平常服)の儘と云ふことにて、即
ちはれやかならぬさまなり

月影に十徳寒し鉢叩 旨原
十徳は、すあうに似て、腋を縫ひつけ又は胸紐を付せり、昔し、侍
は絹製のもの、其以下の身分にては布製のものを用ひたりしが、後
には腰より下に襜(ひだ)を付け、専ら醫師などの着るものとなれり

さしぬきを足て脱く夜や朧月 燕村
山吹やさしぬき濡るゝ徒渡り 几董
さしぬき(指貫)は、裾をふくらし紐にて括りたる袴なり、昔しは
衣冠、直衣、狩衣を着る時に之を用ひしなり

しけ絹に紙衣とり合ふ御影哉 尙白
しけ絹は、織物の名にして、屑絲にて織りしものを云ふ、今は軸物
の表具などに用ゆ

だんだらの被衣に逢ひぬ臙月 子規
だんだらは、波動の義にて、染模様を云ふ、即ちだんだら染(波動
染)の略なり

短夜や宿直袋のあげ下ろし 白雄
宿直袋とは、宿直の物を入るゝ袋なり

年の豆誰がかいとりの摺衣 行露

摺衣すりころもとは、青摺りにしたる古の衣服を云ふ、古歌に——春日野の若紫の摺衣忍ぶの亂れ限りしられず——とあり

てゝら干す竿の雫や花大根 三挺

てゝらは、じゆばん(襦袢)のこと、蓋し東北地方の方言なり

額額に梅散りかゝる佳節哉 十步老

額額は、さくとち(菊綴ち)と訓む、即ち直垂などの縫ひ目の、綻びぬやうに縫ひ付けたる組緒の餘りを縮ね、推しひらめて菊花の如くにせしものを云ふ(古語)

隠す事いつか穂に出て常陸帯 芳草

一すじに願の丈や常陸帯 月兔

常陸帯とは舊正月十四日常陸國鹿島社の祭に、相思ふ男女の名を書

さしるして供へ、巫子の之を結びて分つを受け、結婚を卜したるものを云ふ、古歌に——こしばやな東路ときく常陸帯のかごとばかりの逢坂の關——とあり

亂れ箱菊折り入れて参りたり 曉臺

亂れ箱更衣の調度何々ぞ 霽月

亂れ箱とは、うち亂りの箱と云ふ義にて、古は手拭などを入れし物なるも、後世は櫛其他の雜具をも入るゝ用に供す

わきもこか油凍れり玉櫛筒 几董

玉櫛筒たまくしげは櫛を容るゝ箱なり、單に櫛筒と云ふべきを、賞めたゝえたる意にて、玉の字を加へしのみ

春風に照すや騎馬の綾蘭笠 太祇

綾蘭笠(あやる笠)は蘭にて編みたる笠を云ふ、あやは其笠をたゝえ

たるなり

眉掃を面影にして紅の花 芭蕉

眉掃は、白き兔の毛を束ねて造りたる長さ二三寸徑一寸ほどにて、眉を装ふために用ふる物、即ち女の化粧道具の一なり、まゆはき又はまいはきとも云ふ

膳まはり外にもなき赤拍 良品

赤拍とは赤飯のことにて、冬至の日に赤飯を焚く習俗あり、其由來は、共工氏の子嘗て冬至に失せて疫鬼となりしが、赤小豆を怖れしゆゑに、冬至の日に赤小豆粥を焚いて之を禳ふと云ふに因る、我國の昔しには、膳のことを、かしはで又單にかしはとも云ひしより、赤飯のことを赤かしはと云ふに至りしならん

玉味噌に醋の見えけり春の雨 猪草

玉味噌の木曾も日頃や梨の花 阿分

玉味噌は製法通常の味噌と同じけれど、只煮豆を搗かずして塊となし、藁にて包み貯へ置くものを云ふ

山吹や水にひたせるゑまし麥 惟然

麥ゑます 門川ほしや青簾 道彦

ゑますとは、水に浸してふやけさすのを云ふ

白箸に子竿ころかおせち哉 無髮

おせち(御節)は、節句に用ふる食物にて、午莠、人參、里芋、焼豆腐などを煮べたるを云ふ

青さしや草餅の穂に出てつらん 芭蕉

青さし(初熟麥)は中古の菓子(稗)にて、青麥を煎し白にて摺り、糸の如くより作りしものなりしと

白川やけんどんさめて時鳥 堤 亭

けんどんは、けんどんそば(儉鈍蕎麥)の略にて、そばきりの一種なり

一鉢や折敷にのせて莖艸 鬼 貫

點々と折敷に見せる小鮎哉 召 波

折敷は、片木折をしきを折り曲げて作りし盆なり、飲食物を盛れる土器などを載するに用ふ

掛盤に顔見て年の新なり 來 山

掛盤は掛子かけはんのある膳を云ふ

待宵やひとり時雨る、蘆屋釜 白 雄

蘆屋釜は、筑前國蘆屋にて鑄造するゆゑに此名あり、僧雪舟の筆に成れる松竹梅の繪模様あり、多く茶の湯に賞用す

竹の子の夏ほとうれし根來梳 許 六

根來塗ねころぬりは、鎌倉時代に紀州の根來より塗り出したる漆器の名にして朱塗に黄を帯び、刷毛目あるものを云ふ

草餅を盛り並べたる葉盤哉 河 柳

葉盤はひらでと訓む、柏の葉を竹釘にて綴ち合せ、盤のやうに作りしものなり、上古には食物を盛るに用ひしが、後世は此の形に似たる土器の總稱とするに至れり

此心推せよ花に五器一具 芭 蕉

五器箸に離れて出るや一季者 李 由

五器は一に御器とも書す、五ツ組に揃ひたる梳にして、携帯に便なるやう一つに纏まるべく組合せ、至極質素に佗しき器具なり、故に禪宗の雲水僧などの常に携へること多し、まかし後世には五器と云

ひて只普通の食椀と解するやうになれり

蛙子は目すり鱈をなく音哉 芭蕉

目すり鱈とは、蛙にてつくりたる鱈を云ふ、昔は此習俗ありしも今は無し

乳麵の下焚き立る夜寒哉 芭蕉

乳麵とは、素麵の中に野菜魚肉の類を混じて煮たるものを云ふ

蓼の穂を眞壺に藏す法師哉 蕪村

眞壺とは特殊の壺にあらず、眞は眞砂、眞弓など云へるに同じく、其物を賞めたゝへたる詞なり

金屈卮おくや九月の更衣 青々

金屈卮は金の曲りし把手の付きたる酒杯のこと、唐詩に「勸君金屈卮、滿酌不須辭」とあり

埋火やほとぎを嚙る古鼠 彩雲

ほとぎは、ほとぎとも云ふ、ひらかのことなり、漢字にては缶の字を擬用す、漢の楊敞が傳に「酒後耳熱仰天折缶而呼鳥々」とあり

藪入や大牢の饗芋團子 青嵐

禮記に「君子大牢而祭」とありて、大牢とは、牛羊豕の三者を具へたるを云ひ、小牢とは牛を去りて唯羊豕のみを用ふるを云ふ、然るに後世には牛のみを以て大牢とし、羊を小牢とせるもあり、要するに大牢とは饗應の厚き義なり

第三類 圖書、文房具

春風のつまかへしたり春曙抄 蕪村

春曙抄は、清少納言の著したる枕の草紙に註解を加へたる書にて、源氏物語の湖月抄と並び稱せらるゝ書なり

鍋敷に山家集あり冬籠 蕪村

旅に出て忌日はしらす山家集 碧梧桐

山家集は僧西行の自ら其作歌を輯録せし書なり

冬籠五車の反古の主哉 召波

俳諧の紙子を造れ五車反古 爛水

五車反古は谷口蕪村が春泥舎召波の追善にとて、集めたる連句集にして天明三年の著なり

平家なり太平記には月も見ず 其角

里人よ秋の夜語れ太平記 蓼太

隠れ家や炬燵の上の太平記 青々

太平記は花園天皇より後村上天皇に至るまで、凡そ五十年間の戦亂を記したる書にして四十卷あり、其文は壯大雄偉にして巧に和漢文佛經の語を混和し、一種の筆力ありて諸物語中の上乗なり、徳川氏の初めには、太平記讀みとて今の軍談講釋師の如きものさへ行はれたり、尊氏歿後五十年頃の作なりと云ふも、作者の誰なるかは數説ありて一定せず

陀羅尼品春の日脚の傾きぬ 鳴雪

佛前に朝の陀羅尼や夏衣 青々

陀羅尼は、梵語にて經文の名なり、之を讀誦して聲音の發達をも相助くと云へり

梶の葉を朗詠集の榮哉 蕪村

梅の月朗詠謠ふ人あらん 曉臺

朗詠集には和漢朗詠集あり、新撰朗詠集あり、前者は四條公任の著にして、國歌と漢詩との朗詠を撰びたり、後者は藤原基俊の著にして前者に倣ひて詩歌文章を集めたり、尙此他に朗詠百集など云へるあり

梅の月源氏の噂女房達 召波
源氏なとほのめく藤の主哉 几董

源氏は源氏物語の略にて紫式部の著なり、其内容は皇子源氏の君と云へる優者を主人公とし、之に紫の上と云へる佳人を配し、其關係來歴を骨子としたる一種の小説的物語なるが、實は醍醐、朱雀、村上の三朝に涉りて、當時の公卿指紳の事迹に準據し、諷刺的のものしたりと云へど如何にや、そは兎も角、文勢圓滑にして婉曲の妙を極めたるにより、我國文學上の至寶として弄はされしなり、全篇を五

十四帖に分ち、桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、松風、薄雲、篝火、初音等の名を用ひあり

竹取の由縁なるらん女七夕 曉臺
簑虫に竹取か宿は荒にけり 几董

竹取物語は作者詳ならずと雖も、平安朝時代の著書ならんとの説あり、其内容は竹取翁と云へるが、竹の中にて偶ま一人の美女を得、之によりて一家富豪を致し、より、後ち其美女の上天するに至るまで、其女の在世間の事を面白く叙述せしものにて、我國の物語中に最も古きものなり

夜涼みや人の置去る西廂記 青々

西廂記は正續二篇あり、著者の誰たるかは諸説紛々として一定せず、其内容は崔鶯々と云へる美人を主人公とし、男女纏綿の情緒を記述

したるものにて、支那隨一の小説と稱せらる

更衣百丈清規讀まれけり

青々

百丈清規とは、傳燈錄に百丈山の懷海禪師が清規禪門を創立すとありて、乃ち百丈山清規寺の禪戒を記せしものなり

何云ふて囁く舟ぞ採蓮歌

召波

閣上に唱和の琴や採蓮歌

碧梧桐

採蓮歌とは、歌曲の名にして、支那の舊俗に婦女小舟を浮べ蓮花を採るの遊戯ありて唱へしものなり、古採蓮曲に——控_レ楫命ニ童侶、齊_レ聲唱採蓮歌——とあり

橘や定家机のあり處

杉風

定家机とは、形ち脇息に似たる小さき机にして、右へも左へも、くりくると自由に向を替え易き構造なり

煤掃や頭に冠るみなと紙

黄逸

みなと紙(湊紙)はすくし(宿紙)の粗製なるものにて、すきかへしの一種なり、すくしは山城國紙屋川より産す、色淡黒なるゆる、うす墨紙とも云ふ

碧眼に一夏眼をさらしけり

句佛

碧巖錄は宋の高僧圓悟の著述せし佛書にして、我國に於ける僧東嶺の碧巖百則辨、又は僧風外の碧巖錄耳林鈔の如きは邦語に和譯せしものなり

孟子讀む郷士の窓や冬木立

召波

孟子は孟軻の編述せし書名なり、孟軻は周の世の鄒の人にて、齊の宣王に仕へ、王道を説けども王之を用ふること能はず、去りて梁の惠王に説く、梁王も亦之を迂遠なりとして容れず、盖し當時の列國

は、擧な策士を用ひ謀臣を重んじ、攻伐是れ事とせしに因る、是を以て孟子孜孜として唐虞三代の美を説けども、到る處之を用ふる者なし、故に退きて門弟と共に孟子七篇を作り、孔子の意を繼述して世を終れり、時に年八十四

水仙や端溪の硯紫檀の卓 鳴雪

支那廣東省の肇慶州の端溪と云ふ處から出る石は、専ら硯に用ゆるが、其色淡紫にして質甚だ緻密なるにより、水を蓄へて、能く數日に耐ふるの特色あり

玉藻集水仙活けて讀にけり 三 允

俳諧玉藻集は谷口蕪村の著にして園女以下女流諸家の俳諧を集めたもの、文政年間の出版にして千代尼の序あり

枯菘に金槐集の君を思ふ 一 堂

金槐和歌集は、源實朝の家集にて四季と戀雜とに分類せり、實朝は頼朝の次子にして、資性温雅常に文學を好み武事に爛はず、和歌を定家に學び、古風の體に熟せり、鶴ヶ岡にて姪公曉の爲に殺さる、時に年二十八

夏 百日 白氏文集置れけり 青々々

白氏文集は白樂天(白居易)の文集なり、樂天は有名の詩人にして、吟する所の詩文は、人皆爭ふて傳寫し、一篇の價數十金に騰りしと云ふ、白氏長慶集の如きは七十五卷の多きに及べり、死後其の墓を過る者、必ず酒を塚前に奠す、爲に墓前の土常に泥濘を成せりと、其欣崇されしことの深きを想ふべし

第四類 樂器、遊伎

鴛鴦啼くや一節切ふく瘦男 白雄
一節切は、竹の一節にて作れるより云ふ、尺八に似て短き細き笛の一種なり

いざさらば投壺まゐらせん菊の花 蕪村

投壺は、支那の周の世頃から行はれし遊戯具にて、宛も太鼓のやうなる壺を臺の上に乗せ、それに矢を投げ込む装置なり、我國の天明時代にも流行し居たりと云へど、其構造法などは多少轉變したらんと思はる

葉櫻や草鹿つくる兵等 蕪村

草鹿は武人の狩に出て鹿を射る術を習ふ爲に、草又は張拔にて鹿の形を造り、之を標的として射を學ぶを云ふ、鎌倉時代に行はれし遊戯なり

禪鞠の膝に落ちけり杜宇 大江丸

禪鞠は毛にて作れる毬を云ふ、平治に——これは何ぞと御尋あればせんきくと申候——とあり

春の雨穴一の穴にたまりけり 蕪村

穴一とは兒童の遊びにして、地上に穴を掘り、少しく隔たりし處より其穴の中へ物を投げ込んで勝負を決する仕方なり

投節の其あと來るや鉢叩 野坡

投節は、一時のとり留めもなき流行の俗歌を云ふ、なげとは即ち無氣の義にて、度外視すること、又無きが如しと云ふ意なり

舞々の場もふけたり梅か本 蕪村

舞々は、足利時代又は鎌倉時代より始まりし一種の俗樂にして、徳川時代に幸若音曲(幸若舞)と云ひしは其變體たりしならん

催馬樂のふし面白き扇哉

鳴雪

催馬樂は、古代の俗樂の名にて神樂歌の類を云ふ、元來は其文字の如く馬を引く時に謠ひしものなりとぞ

手古舞や夕日にかざす紅扇

霽星

手古舞は、俗間の祭禮の場合に屋臺の上にて踊る簡易の舞踏を云ふ

輪燈の油凍らん磬の音

句佛

磬は樂器の名にして、元來は堅き石を曲れる形に刻み、之を吊して敲く、其音高く澄みて清し、後世には銅にても之を作る、即ち銅磬是なり

帶せぬそ神代ならまし踏歌宴

其角

踏歌宴は昔し禁中に於ける正月行事にて、十五日には男踏歌十六日は女踏歌とし、少年童女が年始の祝言を歌ひ舞ひしを云ふ、一説に

は是れ後世の萬歳樂の起りなりとも云へり

地諷や花の外には松はかり

其角

地諷とは舞臺に向ひて、右の方に居並び能樂の地を謠ふのを云ふ

永き日を云はで暮るゝや壬生念佛

蕪村

壬生念佛は京都の壬生寺にて執行するものにして、物を云はずに演ずる狂言なり、こは當寺中興の祖たる圓覺上人の創めしものにて、花盗人、紅葉狩など總じて二十五番の猿樂あり、蒙昧の輩を誘ひ、菩提に入らしめん方便なりしとぞ

かしこくも羯鼓學びぬ鉦の先

召波

羯鼓は樂器の名にして、太鼓の一種なれど、其腰は鼓に似て稍長く、臺に据ゑ、撥もて兩面を撃つ

第五類 舟車、漁農具

氷りつく 蘆分舟あしわけふねや寺の門 太 祇
蘆分舟は、蘆の茂りたる中を漕ぎ分くる小舟なり、故に蘆分小舟あしわけをふねとも云ふ

日のかげや片輪車に春の艸 紫 曉

片輪車とは二輪あるべき車の一輪なきを云ふ

地車のとゝると響く牡丹哉 蕪 村

地車に立ちゆく草の胡蝶哉 召 波

地車とは物を運ぶに用ふる大なる車を云ふ

指南車を胡地に引去る霞哉 蕪 村

昔し支那にて黄帝軒轅氏の時亂を爲す者あり、能く大霧を起して帝

の軍を惱ます、因て軒轅氏、指南車を作りて大に戦ひしとあるのが
指南車の始まりにて、其後周の成王の世に、蕃臣來朝して歸路に迷
ひし時、周公車五乗を作りて賜ひしとあり、是れ指南の構造に依り
しものなりと云ふ

蝙蝠の轅に落る嵯峨野哉 闌 更

轅ながえは長柄の義にして、即ち車の柄の長く前方へ斗出したるのを云ふ

地車の轄ぬけたる枯野哉 白 雄

轄くさびは車軸の端の穴に貫し通して、車輪の脱けぬやうにするもの

離舟呼ぶ沖中川や時鳥 青 々

離舟は離別の舟なり、遠きに別れ行かんとする人の乗れる舟を云ふ

蛸壺やはかなき夢を夏の月 芭 蕉

蛸壺の蛸も出て聞け初時雨 樽 堂

蛸壺たこづはは蛸を捕る器にて、燒物の壺の底に細き穴をあけ、紐を付て海底に沈め置けば、其壺の中に蛸の這入り居るを引上げて捕るなり、又地方によりては、燒物とのみ限らず、大なる竹の一節を切りて之を沈め、或は大なる貝壺(蝶螺の如き)を沈めて、之に代用するの簡便法もあり

河骨の花起き直る纏のあと

子規

纏もれて砂にまみるゝ小鮎哉

古律

纏(さで)は魚を捕る具にして、箕の形ちのやうに木の枝又は竹を撓めて、之に網を張りしものなり

粟の穂のびくに入れたる鶉哉

惟然

びく(罅)は繩にて作れる畚を云ひ、又は魚を入れる竹籠なども云ふ

引かけて行くや吹雪の豊島莫蔭

去來

豊島莫蔭としまいざは、攝津國豊島郡に産する莫蔭にて、其地の名産たり

やりくれて又もさむしろ年の暮

其角

さむしろを畑に敷て梅見哉

蕪村

さむしろ(狭庭)のさは發語にして、單にむしろと云ふに同じ、即ち幅の狭きむしろなり、古歌に——さむしろに衣かたしき今宵もや——とあり

第六類 雜具

藻の花や金魚にかゝる伊豫簾

其角

伊豫簾とは伊豫國露の峯に生ずる篠にて編みし簾を云ふ、其篠甚だ細くして節少く、長七八尺に及び、上品なる物なり

關伽桶は何の花をも五月雨 蕪村
關伽は、梵語にて佛に供ふる水の義なり、關伽桶は其水を汲み入る桶を云ふ

一番に雪の雫や酒はやし

吳笠

山蔭の木槿は白し酒帘

鳳毛

さかはやしは、酒旗の義にて、酒肆の看板なり、酒帘も亦同じ、支那にては、酒肆の門に小さき旗を立て、其目標とすること、猶我國にて杉の葉を丸く束ねて、酒屋の檐に吊すと同じきなり

夏山や神の名はいざ白にぎて

蕪村

にぎては、神前にさぐる幣のことなり

芍薬に赤きみてぐら戦くなり

八重櫻

みてぐらは、神に奉る物の總稱にて即ち幣の類を云ふなり

垂手を吹く薫風桶の神々し

句佛

垂手は一に四手と書す、即ち垂の義にして、柳の枝又は七五三繩などに、紙を切り下げて神前に供ふるものを云ふ古歌に——けふまつる神の心やなびくらんしでに波立つさはの川風——とあり

曼陀羅に大葩の牡丹活けにけり

零史

曼陀羅とは梵語にて淨土のありさまを描きたる像を云ふ

狩入て露うち拂ふ鞞哉

召波

狩倉の露に重たき鞞哉

蕪村

鼠とも春の夜荒れぞ花鞞

半殘

鞞は昔し武士の矢を納れし器にて、外、圓長にして内、空虚なり、花鞞とは鞞の美なるをたへし詞なり

更衣聯に句を書かんとぞ思ふ

四宵

聯は細長き板に書畫を書き、柱などに懸けて飾とするもの、一名柱かくしとも云ふ

梓弓末の末子の袴着や 井村

梓弓は、あづさにて作りし弓の義なれども、枕詞としては、弓に縁みて或は引くにつけて、張るにつけて、又は射るにつけて、末にもかけて云ふ、此句の如きは末につけてたるなり

うば玉は烏芋のにしめ花柚哉 樗良

蝙蝠や人うば玉の落しさし 麥水

ぬば玉の夜の茄子もちぎりけり 岱青

うば玉(羽玉鳥)は、ぬば玉(射干玉)に同じ、射干玉は黒きなるゆる枕詞として黒き意味にかけて用ゆ

獨 鈷 鎌 首 水 掛 論 の 蛙 哉 蕪 村

獨鈷とは、五鈷三鈷など、同じく、天竺の武器たりしが、眞言宗の僧侶は概ね手に之を携ふること常なり、此句は眞言の僧たる顯照と、首の長かりし寂蓮法師と、歌に就て云ひ争ひたるを滑稽的に叙寫したるなり

麗 や 紙 梵 天 の 高 櫓 杉 門

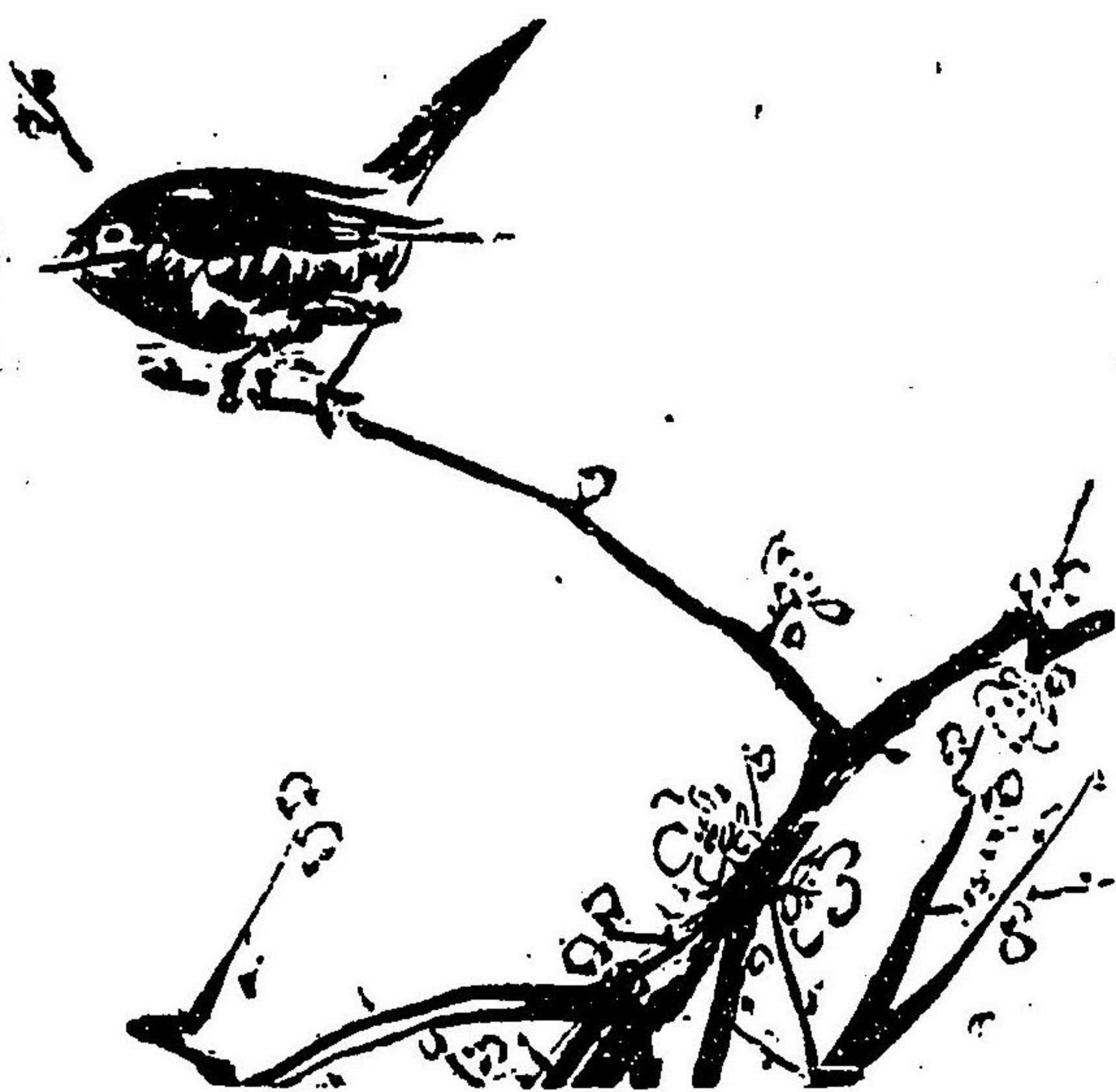
梵天とは、修験道にて悪魔を拂ふための幣束を云ふ、紙梵天とは紙にて作りし幣束なるが、芝居櫓の上などに高く掲げあるの類なり

錦木を立てぬ垣根や唐辛子 蕪村

錦木の男見付けぬ星逢夜 獨雪

錦木はまだらに彩りたる一尺許の木片にして、古へ奥州の習俗に、男女相逢はんとする時、之を其家の戸口に立て、文通の代りとなししとぞ (正誤 244丁の龍塞の一項は削除す)

俳句資料解釋畢



明治四十年三月十七日印刷

明治四十年三月



發行

俳句資料解釋

定價 金參拾錢

編者

峯 是三郎

發行者

大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

吉見繁藏

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地



發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

小自在庵四明 中川霞城君著

平言 俗語

俳諧美學

全一册

洋裝大判並製
紙數二百五十餘頁
正價參拾錢
郵稅六錢

卷頭 口繪

(春) (夏) (秋) (冬)

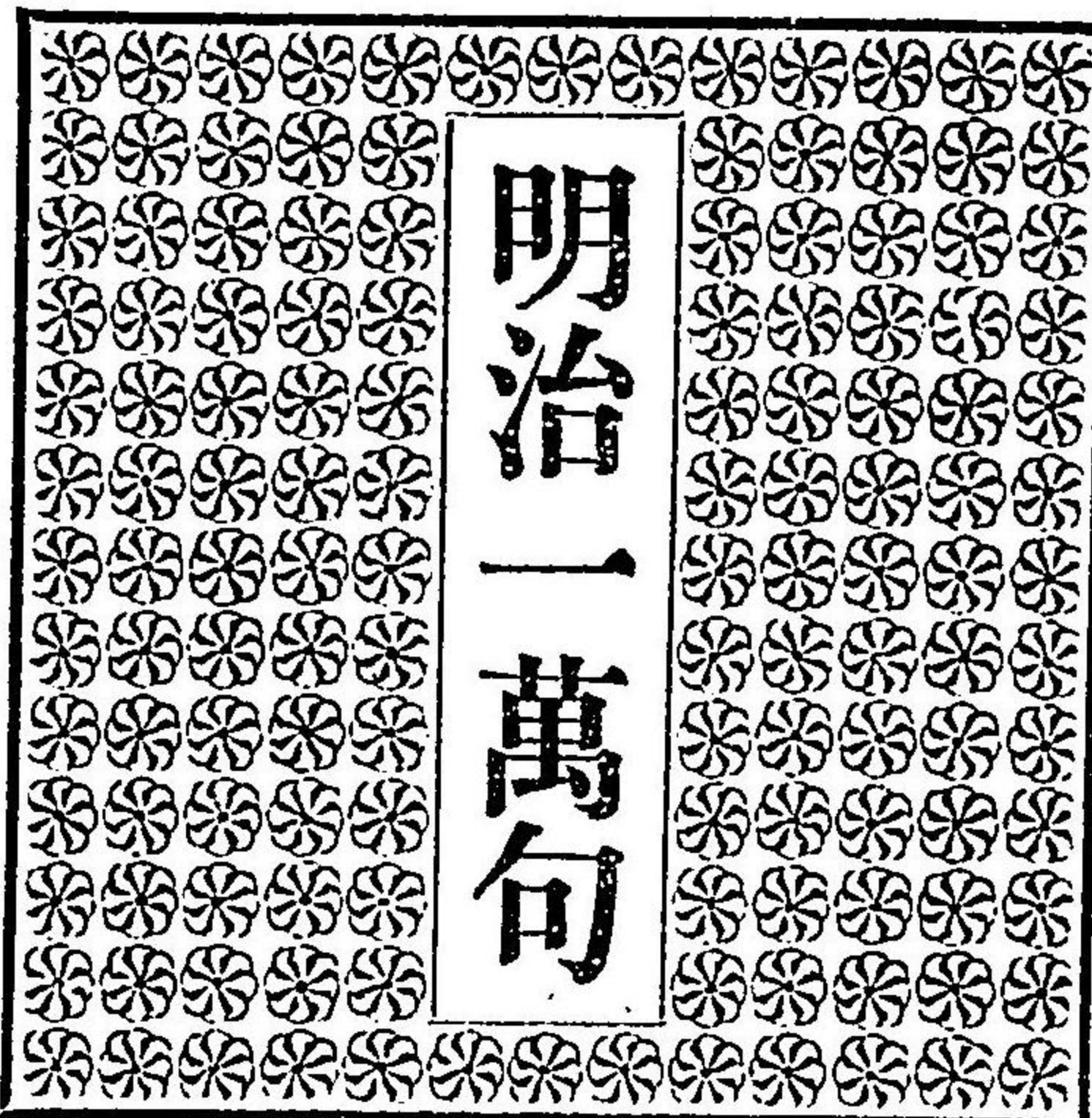
さしぬきを足で脱く夜や臘月
朝露によれてすゞし瓜の上
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
風よ世に捨はれぬみなしぐり

香嶠畫
芳文畫
栖鳳畫
春舉畫

俳諧書の世に出づるもの汗牛充棟も管ならざれども未だ曾て本
書の如く一部の美學として其系統に従ひ俳諧の美を縦横より解
釋したるものなし本書は殊に高遠なる眞理を平易に通俗に説明
したれば俳諧を學ぶ人は勿論美學を修めんと欲する人の爲にも
無二の良書にして古今名家の俳句五百餘首を擧げて例とし尙ほ
詩歌、文章、能狂言、院本、脚本、易狂詩、川柳の類にも及びた
れば美學の書にして斯の如く解し易く斯の如く趣味多きもの他
にあるを知らず。

内藤鳴雪翁題句
今井柏浦君編

第五版



明治一萬句

正價三拾五錢 郵稅六錢

全一册 洋裝橫綴美本
中版紙數四百四十頁

芭蕉の歿後蓋し俳壇の闇
其間俳諧の起りて奇蹟
清一の麻之新調を起し
亦一の風靡たるも蕪村
須臾に混濁の亂極なり
に於て道に光を發し
明治の文學史に於て
非ずや其の如く俳壇
壇生易果て而して正
先づ易果て而して正
とき一易果て而して正
述るべし其の如く俳
想とるべし其の如く俳
近五十年の間に於て
河東碧梧桐の眼を以
所始め梧桐の眼を以
百題日餘の同人各に
り。題日餘の同人各に

(三)

發兌元 東京本町 博文館

(三)

—(行發館文博)—

正郵 壹稅 壹冊 金價 參拾 錢
 減價 分賣 壹冊 金價 貳拾 錢
 郵稅 壹冊 壹冊 金價 貳拾 錢

文庫

壹割貳分引 ● 貳拾冊以上 壹割五分引

- 【一三】俳諧論集 巖谷小波君校訂
- 【一四】素堂鬼貫全集 大野酒竹君校訂
- 【一五】續俳諧論集 巖谷小波君校訂
- 【一六】俳諧句合全集 角田竹冷君校訂
- 【一七】蓼太全集 雪庵雀志君校訂
- 【一八】俳諧珍本集 大野酒竹君校訂
- 【一九】俳諧逸話全集 巖谷小波君校訂
- 【二〇】俳諧逸話全集 鶴澤四丁君校訂
- 【二一】附合作法全集 伊藤松宇君校訂
- 【二二】俳諧類題句集 上卷 尾崎紅葉君校訂
- 【二三】俳諧類題句集 下卷 尾崎紅葉君校訂
- 【二四】俳諧紀行全集(減價) 佐藤飯人君校訂

(五)

博文館

區本町三丁目

俳諧

全二十冊

大判洋裝並綴
 紙數壹冊貳百廿頁以上

壹割五分引 ● 拾冊以上

- 【一】芭蕉全集 老鼠堂永機宗匠訂
- 【二】芭蕉以前俳諧集 上卷 大野酒竹君編纂
- 【三】芭蕉以前俳諧集 下卷 大野酒竹君編纂
- 【四】其角全集 老鼠堂永機宗匠訂
- 【五】許六全集 阿心庵雪人宗匠訂
- 【六】也有全集 大野酒竹君校訂
- 【七】嵐雪全集 岡野知十君校訂
- 【八】支考全集 雪中庵雀志宗匠訂
- 【九】蕉門十哲集 老鼠堂永機宗匠訂
- 【一〇】元祿名家句集 其角堂機一宗匠訂
- 【一一】一茶大江丸全集 晉雪庵柳涯宗匠訂
- 【一二】蕪村曉臺全集 大野酒竹君校訂

(四)

東京市日橋

發兌元

博文館

振替貯金口座

第二百四十番

内藤鳴雪翁題
竹村秋竹君編

明治俳句

全一册
洋裝美本

從四位男爵 澁澤榮一君題辭
春秋菴幹雄 十萬堂紅葉君題辭
老鼠堂永機君序文 三宅青軒君編

俳諧獨學

全一册
洋裝美本

正價金二十五錢

郵税金六錢

僅かに十七字中に物象情懷を詠じて限りなき餘韻風趣あるは俳諧なり、今や斯道に志すもの都鄙に多く俳運の盛なる正に元祿時代に迫らんとす、本書は斯道の業として丁寧懇切に句作の法式例等を擧げ初歩より堂奥に至るまで殆んど漏らす所なし、篤志の人幸に之に由て俳諧の眞味を咀嚼し給へ。

(六)

博文館發行

俳諧自在

袖珍總クローズ
文字入 紙數壹千二百餘頁

老鼠堂永機宗匠著

有情無情天地の森羅萬象を捉へて、之を十七文字の中に收むるもの、是れ我俳句にあらざるや、此平民的文學を解釋して、其起原の沿革及び作法等を精細に叙述して、初學者の指針たるもの、此書なりとす。俳界の一泰斗永機宗匠の心血を凝がれし書、請ふ一本を購ふて斯道の妙を味ひ給ふべし。

正價金壹圓

郵税金拾貳錢

發兌元

東京本町

博文館

博文館

振替貯金口座

第二百四十番

俳諧玉葉集

全一册

孤山堂卓郎翁序
一葉舍仙鳧翁輯

和裝橫綴
紙數九拾枚

正價拾五錢
郵稅四錢

(七)

北村季吟君撰 高井蘭山君訂
俳諧増山の井
 全二冊 正價貳拾錢 郵稅六錢

芭蕉翁編
掌中俳諧七部集 全二冊

角田竹冷君閱

○本書は延徳元年より明治三十四年に至る迄四百十三年間世に知らるゝ俳人及び之に關する著名なる事蹟總てを網羅したる年表にして近年稀なる珍書なり
 ○此書により山崎宗鑑が一休和尚に參禪せし以來俳道の出來事俳人の生死俳書の編述等一目の下に瞭然たり
 ○俳家文學家歴史家必携の書なり

俳諧年表

牧野望東君
 星野麥人君
 共著

全一冊 正價六拾錢 郵稅八錢

——(行發館文博)——

高井蘭山君著
俳諧節用集 全二冊

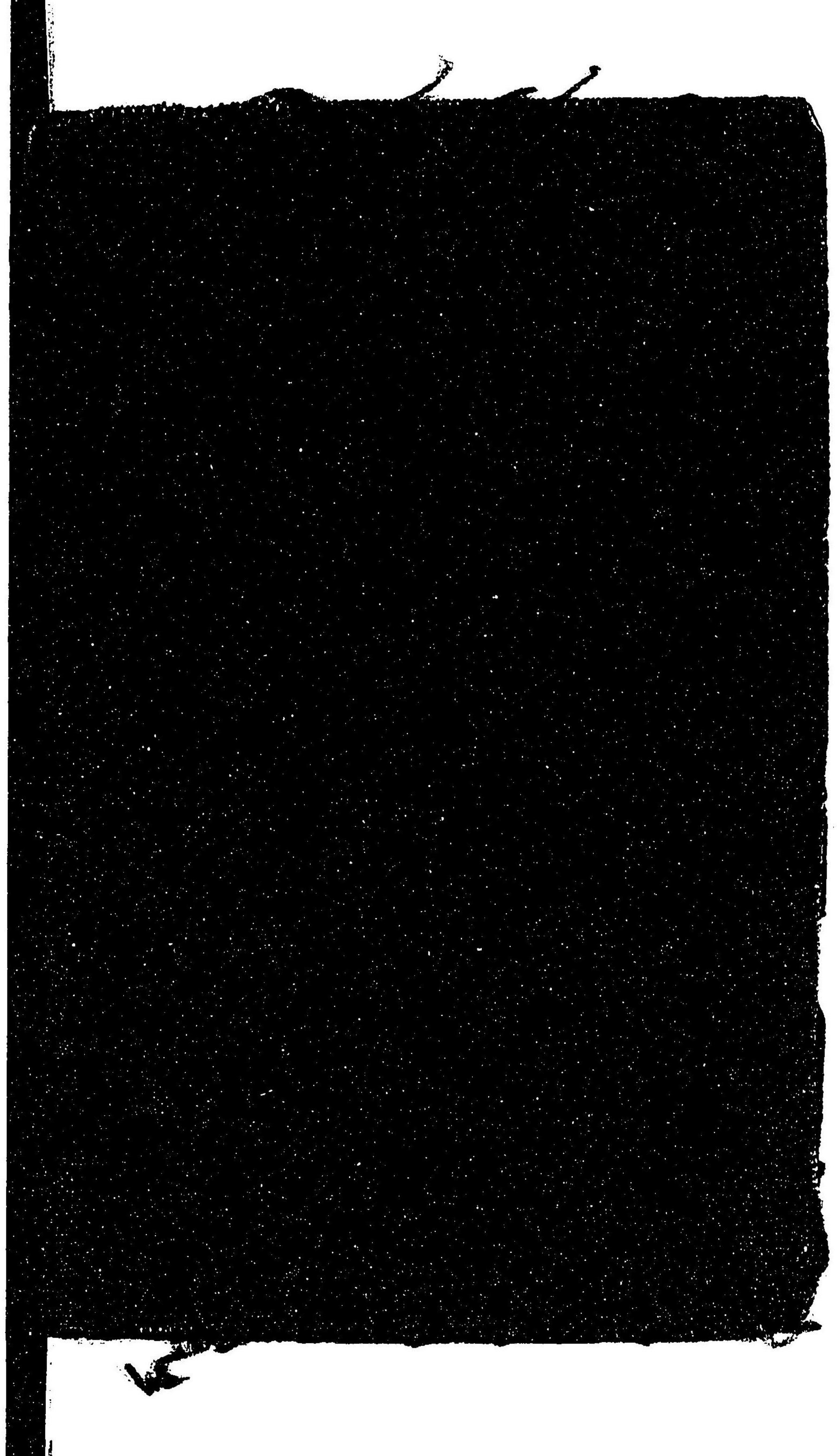
正價貳拾錢
 郵稅貳拾錢

正價貳拾貳錢
 郵稅四錢

俳諧社寺中校
一茶句集
 全二冊 正價貳拾五錢 郵稅六錢

79

1186



087432-000-5

94-486

俳句資料解釈

峰青嵐/著

M40

DBE-0782

